

すぺーすびーすと!～ネクサス怪 獣擬人化作戦～

地獄星バロー

ウルトラシリーズ屈指の恐怖の異生獣・スペースビーストがかわいい少女達に!!
ノスフェルが、ガルベロスが、イズマエルが擬人化されて地球に再び戻って来た
!!

あなたは立ち向かう？ それとも侵略されちゃう？

「怪獣少女達が再び地球を大侵略!!」

銀河に散らばる光と闇の勢力がぶつかりあっていた時代。

地球では少女と化した異生獣・スペースビースト達が秘密裏に暗躍していた。

そんなスペースビースト達と深く関わっていくことになってしまった新人OL・古
紋アキ。

これはそんな数奇な運命を背負うことになった彼女と、スペースビースト達の
恐ろしく、しかし時に儚くも可愛いらしい、異生獣娘たちのちょっとゆるい物語。

この物語は、ウルトラ怪獣擬人化計画で不遇な扱いを受けているネクサス怪獣、
所謂スペースビーストを救済すべく勝手に制作された小説です。皆さんの力で盛り

上げて公式が再始動、そしてスペースビーストの擬人化してくれる手立てになるよう盛り上げていきましよう！

Twitter↓『#すぺび』

＊お知らせ＊

ストック切れしていることと、作者のリアルの都合上、更新スピードがガクンと下がってます。ですがゆっくりながらも精一杯続けたいと思っていますので今後とも応援よろしく願います！

目次

＃1 最恐のスペースビースト現る！（朝から晩までマリオネットにされちゃうよ!?!）	1
＃2 人間生活って何ですか？（教えるのは大変！もうロスト・ソウル寸前……）	13
＃3 最初の刺客、ダークガルベロスの奇襲！（この星のレリックまでは壊さないで！）	27
＃4 ガルベロス、高校に通う!?!（もうダークネスから抜け出したの?）	43
＃5 アキのTLT社蓄生活！（ヒーロー気取りのカメラマンに付け回されてもう大変!!）	57
＃6 光の勢力・ネクサスの進撃！（ウルトラマンとは違うらしい!?!）	75
＃7 光と闇の驚愕の正体!?!（ワーニング！影が襲ってくる!?!）	97

＃8 共同戦線！アキちゃん様を救い出せ！！（ファウストなんて怖くないもん！）

#1 最恐のスペースビースト現る! (朝から晩までマリオネットにされちゃうよ!?)

光と闇。

それは常に反発しあう存在。

この墨色に染まった夜空、帰り道の炭色に染まる無機質なコンクリの地面、そしてわたしの歩く影というところに闇がある。

それに対して眩い電灯、一軒家やマンションから漏れる光、そしてわたしが触れているスマホから溢れるブルーライトという光が反発している。

この時のわたしはまだ気付かなかった。

いや、気付けなかったのかもしれない。

この光と闇の果てしなきバトルに白黒を付けるのはわたしだったということ。

どうしたものなのだろうか。

「ぐふえふえふえ♡アキちゃん様ア〜!!」

その日、わたしがベッドで目覚めたら、目の前に変な少女がいた。まるで痴漢をするオッサン顔をして、薄気味悪くニタニタしながら、目を離さずにマウントポジションを取っていたのだ。

その容姿を見るからにはわたしと同じくらいの20代辺りの年齢らしい。見た感じ、現在進行形で感じる姿と重さから推測しても、恐らくわたしと同じくらいの身長と体重で間違い無いだろう。一般的に見ても違うところは彼女の目が死んだ魚のように白く、ボサボサな青髪で、何よりバストがわたしよりもちょっと大きいところだ。いいなあ……。

じゃなくて！この状況普通に怖いんですけど。ついでに彼女の服装は全身薄い桃色のコート。その姿のまま見ず知らずの人にマウント取ってくるあたり、やっぱ

り普通じゃない。単純に怖い。

「はあっ!? もしかして、もう起きちゃった感じですか？」

昨日はアンナに大胆

だったのにいゝ」

しかしこの子は社会人であろうに、不法侵入という言葉を知らないのだろうか。あるいはわたしが寝ている目の前で堂々とコソ泥を? それに彼女はなんでさっきからよだれを垂らしてわたしを美味しそうな目で見てるの!? てかさっきの言葉の真偽はなんなの!? ——まさか、この人そういう系の人……。てことはわたしはもう一線を——。

当然ながらわたしの脳内はかなり混乱していた。

「えっ、あのちょっと、一体わたしはどうなって……!?」

ぐるぐるに目と頭を朝から回してベッドから寝た姿勢で数分程硬直していたことによりやく気付いたわたしは一旦冷静になる。もしかしたら、幻を見てるのかもしれない。とりあえずガバッと上半身を起こして思いつ切りほっぺをつねってみる。でもやっぱり彼女はいる。ああ、もう……。

わたしの様子をしばらく見つめていた彼女は、突然突拍子も無いことを言い出し

た。

「おはようございまあいす、アキちゃん様！ 改めて今日からずうっとお邪魔しまあいす♡」

はい？

あなたが？

この家にお邪魔する？

今日から？

ってずっと!?

え？ この子と一緒に暮らせと？ なんで？ いつわたしがそんな許可を？ ってかあなた誰？

自己紹介をしよう。

わたしの名前は古紋こもんアキ。23歳の女性。半年前にTLT社という世間の仕事の

売り上げやデータを一括に収集して、管理するみたいな仕事に勤めているOLだ。今は物価がいいこの安アパートで暮らしている。しかしこの謎の女性、わたしの仕事の知り合いにも、学生時代でも、変な色をした髪の子と知り合ったことなんてない。じゃあ一体全体何がどうなってこんなことに……。

「あのお、あなたは……どちら様でしょうか？」

「え？ 私のこともう忘れてしまったんですか!? ノスフェルですよ！ ノ・ス・フェ・ル！ 闇の勢力の！ 昨日の夜にこの家にずっと住んでいいって言ってくれたじゃないですか！」

のすふえる。一体どこの外人だろう。しかもなんかアニメっぽい居候話を語っているんだけど、そんな約束をした記憶がまるでない。なんせ昨日は仲の良い先輩and後輩と一緒に飲みに行ったので、酔いに酔ったわたしはあんまり覚えていないのだけど……。

「ええっと、とりあえずその昨日の夜の経緯を教えてくださいませんか……？」

「あつ、はい、分かりました！ 実はですね……」

「ということなのです♡ これでOKですか、アキちゃん様？」

「はわわわ……嘘でしょ嘘でしょ嘘でしょー!!」

あー。なんてことだ、些細な過ちだ……。

だんだん思い出してきた。確かにそんなことを言ったような感じがする。わたしのおぼろげな記憶とノスフェルが言うことには、昨日のわたしは酔っ払いながら家に帰り、ベッドにダイビングしようとした時にチャイムが鳴った。ドアを開けてみると物凄い形相をしながらこの娘が飛びかかって、

「お前の恐怖を喰わせろ……さもなければ肉ごと喰い殺す！」

と言ってわたしの首を掴んで襲おうとしたそうだ。彼女はどうかやら闇の勢力(?)とかいう光のなんちゃらと対立している銀河の何処かにある組織に所属するスペースビーストで、光と闇が常に交わり合う星、即ち地球を制圧して闇の天下を取るべく、ノスフェルは仲間達と共に世界を闇に墜とそうとやってきたのだ。

ちょっと情報量が多いなあ……。ってかすぺーすびーすとして？

「うーん。人間はまだ見たことないでしょうしねえ……まあ簡単に言うくと、異生獣です！ ちなみにわたしはスペースビーストの中では一番強いですよ！ ……多

分」

異生獣、ってことはノスフェルはモンスターアア!?　なんで人外がこんなところ!!　これって最近の夜中のアニメでよく見る擬人化ってやつ!?　本当にヤバイようしたらいいのコレ……。

「突っ込むところですかー?」

ああ、確かにそうだ。なんで異生獣であろうノスフェルがこの人型になっているのか?　あろうことかわたしと同じくらいの年齢の女性に。

「その質問、待ってました!　実はですね……私もよくわかりません!!」
「分からないの!?　話振っというて!」

「今まではみんないつもカッコイイ怪獣のような姿だったんですが、どわああー!　って、宇宙から地球の中に入った途端、わたし達みんなこんな感じの姿に変わっちゃったんですよ……」

原理は分からないけれど、さすが地球はオタクの星だ。こんなバケモノ達でも擬人化するとは。いやいやちょっと待って!　そんなのが一杯地球にいるってことなの!?

「良いから話を進めますよ！」

あっごめん。

それでノスフェルは、手始めに人間の恐怖を得るべくたまたま付近を歩いてたわたしに目をつけて、家を特定、そうして始まった闇への勧誘（どう考えても脅迫だったけど、本人は勧誘と言い張っているのでそういうことにしておこう）に対して、寝ぼけていたわたしは、

「あ？ わたし？ うーん……恐怖よりいゝわたしの心奪ってゝあはははー！！！」
と狂った発言。え？ わたしそんなこと言った？ ってか全然思ひ出せないわ……昨晚の記憶全部飛んでるし。

「貴様……舐めた真似を。まっ、良いだろう。記念すべき最初に目を付けた女だ。喰われ様ぐらい選択させてやる……。さて、どのようにお前の心、いいや心臓を奪ってやればいいのだ？ 爪でえぐり抜けとかか？ それともお前の故人の幻影に心臓そのものを捧げるとかか？ フハッハッハッハッ！ さあ決めるがいい!!」

とノスフェルは片腕だけを怪獣の姿に変えながら叫び散らした。それにわたし

は、

「ちーがーうよう例えーばー、わたしと一緒に暮らしてー、恋に墮ちちゃうとか？

アハハハハ」

と更に大いに狂った発言。道理で昨日少し変な夢を見たわけだ、わたし。

「なんだコイツ……。ふん！ そんなノタノタとやっつけられるか！ わたしには……時間が、時間がねえんだよお!!」

とノスフェルはわたしを拘束して締め上げようとする。まっかつかな顔色のわたしはふにゃふにゃしながら聞く。

「でも……大変なんですよ……？ わたしの家に来なよ、世話してあげる。」

はは……ちよっと待ってよ。確かその変な夢は、捨てられたハムスターを家に連れて帰るようなものだけど、なんか展開がそのまんまな気がする。でも夢だよね……うん。ただの夢……。

「そ、それは……。だがそんな悠長なこと……」

寝ぼけてる人に図星されるってどういう気持ちなんだろう。わたしはそのままノスフェルの顔に手を触れる。

「ほら、ちゃんとわたしの顔見て」

そのままわたしは唇に顔を近づける。え……何やってるの、わたし？　嘘……

でしょ!?

「お、おう……」

ちよっ……ノスフェルも駄目だって……!?

「んっ」

あああああなにしてみんだわたいい!?!?!?!?!?

「……なんだ……この感触は……!?!」

柔らかい感触が伝わり、ノスフェルの顔色が少し赤くなる。わたしはノスフェルと唇と唇を重ね合い、キスをしてしまっていた。多分ノスフェルにとってもファーストキスだよ。わたしにとっても……。その後すぐにわたしはふらふらとしながらベッドに戻って眠ったらしい。これに心打たれた(勝手に恋に落ちた)ノスフェルが今日、いや正確には昨日の晩からこの家に居候することになったわけね……。

おかげで昨日の夢の経緯まで全部思い出しちゃった……百合百合しい、悪夢だ……。

「と、いうわけで、これからおねがいしますよ？　アキちゃん様あ！　早速一緒

にやりましようよお♡」

駄目だこりあ……昨日はすっごい殺意の気迫があったらしいのに、今はメロメロ。しかも性的な発言にしか聞こえないことばっか言ってる。とりあえず誤解を招くような発言はやめて！わたしはそっち系じゃないから。というか頼むから家からでてほしい！……なんて言えない。さもなくばいろんな意味で襲われそう。仕方ない。

「……まあ、一応良いけど……」

「わぁー!! ありがとうございますう、アキちゃん様！……それなら今晚はもう合意ってことですね？」

「断じて違う！ 昨日のは寝ぼけてただけなんだからね！勘違いしないで!!」
「むう……。わかりました、でも私は闇の勢力でありながら一度アキちゃん様に心を奪われた身。だから決って諦めませんよ! 必ずアキちゃん様の心も奪ってあげますからねー!!」

はぁ……。でも悪くない、独りぼっちじゃないのも。

こうして、わたしと『すぺーすびーすと』のノスフェルとの奇妙な生活が始まったのだった。でもなにか忘れてるような……。そう思いながらスマホを持って時計を見……

「あっっ！?!?!? 会社！ 今日もあるじゃん!? やっぱ遅刻するう！」

完全に忘れてたあっ!?

「アキちゃん様？ 私も手伝いますよー！ はい、バッグです!!」

おおありがとう……。ってそれは画用紙！ とっ、とにかく行ってきまーす！

「はーい!! でも早く帰ってきてくださいよ♡♡」

「はいはい分かってるわよ。言われなくなつてノスフェルが誤った使い方して、家のものを沢山荒らすかもしれないしね！」

「そっ、そっちですか?!」

＃2 人間生活って何ですか?(教えるのは大変!もうロスト・ソウル寸前……)

わたしの名前は古紋アキ。どこにでもいるような新人OLの女性!

ある朝、今日も仕事しに会社に行こうとベットから起きたら、自分のことを異生獣と名乗る変な娘・ノスフェルと出会い、そして暮らすことになってしまった。

今日はそんな記念すべき生涯後悔しそうな初晩。人間じゃないノスフェルのことだから絶対家の物々荒らしてる気がしてならない。なのでわたしは今日になるべく早くに帰ってきたわけだけ……。

「ただい…はあ、もう勘弁してよ……」

ある程度予想していたとは言え、ゴチャゴチャに散乱している本棚や小道具。その中心でノスフェルは子供のような純粋な仕草で木っ端微塵に学生時代に描いた

絵を粉碎する。掃除嫌いなわたしですら嫌悪しそうな汚れっぷりにわたしは絶句した。まさかここまで無茶苦茶にされてしまうとは……。

「いてて……なんですかコレ？……あっ、アキちゃん様♡お帰りなさい！」

案の定、ノスフェルは家を荒らしていた。まあアニメや漫画でよく見る異種族との生活ギャップあるあるのド定番かもしれないけどさっ……。怒りをなるべく露わにしないように心に押さえ込んで返事をした。

「うん……ただいま……ノスフェル」

とりあえずわたしはまだ荒らされていない安全圏に荷物を置いて、片付けられそうなどころから目を配る。するとどうであろうか、冷蔵庫が空きっぱなしで野菜や果物が床に転がり込んでいるではないか。嫌な予感がしたので、さっとノスフェルの方を再び向いた。

「アキちゃん様、ところでこの黄色い棒みたいなのはなんですかー？ もしかして私とアキちゃん様の練習用のアレですか？ もぉーアキちゃん様って積極的♡」わたしはノスフェルの言いたいことを理解するまでそう長くはかからなかった。

なんでこの娘は胸だけじゃなくこうもそういうネタも豊満なの? それに冗談でもわたしは女なんだからノスフェルなんかとしたくなんかない! 私は少し赤面になりながらも私は叫んだ。

「腐るからさっさとバナナを冷蔵庫に閉まって!」

「えー、もう、アキちゃん様ったら意地悪♡」

ううう……。なんでこんな目に……。このままじゃいつわたしの貞操を奪われてもおかしくないよ。なんとしてでもノスフェルと異種姦の関係になるだけは避けな
いと。第一わたしもノスフェルも女性なんだし、そっち系の道には間違っても行きたくない!!

「わたしはそおーゆうエロ発言は嫌いなもの! 　　というかどうして異星獣の癖にそんなこと詳しいのよ!」

「なに言ってるんですか! 　　生命を次世代に繋ぐには大事なことですよ! 　　それと私達スペースビーストは振動波でお互いの得た情報を共有することが出来ますからね!!」

「いやいやそう言うことじゃなくてね、ノスフェル……」

AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

AAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

AAAAAA

「——でもって、この道具はこう使うの。分かった、ノスフェル？」

「なああーるほど！ わっかりましたあ！ 家事のことはオールインプットしました！ あとはお任せください!!」

ふう……人に物を教えるってこんなに大変だったなんて。ノスフェルが日本語を理解していたことが不幸中の幸いだよ、なんせ海外ならワン、ツウースリーで統括してるものをいっ『ぼん』、に『ほん』、さん『ぼん』。いちまい、にまい、さんまい。そしてひとり、ふたり、さんにん……って細々と分けたりしてるもんね。親が子供に基礎的な教育をする際の辛さが気持ちが見に締めて理解したよ。でもノスフェルが覚えが早いお陰で助かった。これもスペースビーストの特徴なのかな？ 色々部屋も片付いて落ち着いてきたのでわたしは気になったことをノスフェルに聞いてみた。

「そう言えばノスフェルはスペースビースト、、なんだよね？ わたし達人間と

違って何か凄いこととか出来るの?」

「はいっつ! よくぞ聞いてくれました!! もっちゃん沢山ありますよ! 私の場合、例えば……」

「ひいっつ!!!」

ノスフェルがそう言った途端、とんでもないことが起きて思わずギョツとしたわたしは腰が抜けてしまった。なぜならば一瞬で彼女の爪が人技とは思えない速さで長く、そして鋭く変わったのだ。恐る恐るわたしは聞いてみる。

「そそ……それって、どう使うのよ?」

「そうですね……昔は無作為に動いてる肉達を適当に斬り刻んでましたけど、今はアキちゃん様に刃向かう愚弄ども全員にですかね!!」

うっふえ……。あとお願いだからもうやめてっ! 気持ち嬉しいけど色んな法律に引っかけちゃう! 爪だけに!!

「ほ……他には?」

続いてノスフェルは舌を長く伸ばして、わたしの顔をぐるぐる巻きにする。息苦しくなり、思わず喘ぎ声が出そうになる。

「うふえっと、ふおんにやひゆうに、アキちゃん様をペロペロしえきるひよどひいしやをによびやしゆこともしえきます!!（えっと、こんなに風に、アキちゃん様をペロペロできるほど舌を伸ばすこともできます!）」

「うっふえ……気持ち悪いし、苦しいからさっさと離して!! それで他には？」
ノスフェルは舌を元に戻して、少しうずくまってから答えた。

「うーん……あ! ダークボウルって個人的に私は呼んでるんですけど、手からドス赤黒い球体をぶつける飛び道具もあります♡これでいつでもアキちゃん様を守れますよ!!……あれっ、これってダークじゃなくてアームって言うんですしたっけ? まあ……どっちでもいいですけどねっ……!」

そう言いながら窓を開いたノスフェルは手から闇のオーラがぶんぶん纏った球体を作り出して投げ飛ばした。物凄い勢いと爆発音がわたしの耳をつんざき、慌ててベランダに出て見上げてみれば、雲にぽっかりと空いた穴が出来ていた。コレはヤバイ……。

「ホントに物騒だからそれもこれも使用禁止!!」

「えーそんなあ……あつ! でも戦い以外にも使える能力ありますよう♪」

ノスフェルは残念そうにしながらもポンと手を叩いてから、ほんの少しだけ頬を赤くした。そんなことには目も触れずに、わたしは興味津々に聞いてみる。

「え、ホント? 例えば例えば?」

するとなんということだろう。

ノスフェルがヒョイと手をクロスしてから怪しいポーズをしたかと思うと、なんとわたしそっくりの人間みたいなのが目の前に現れたのだ。

……っえ!?

こ……これはどういう……???

「これはビーストヒューマンって言って、私が念じた人間の分身をそっくりそのまま召喚出来るのですよ! 私はビーストヒューマンを使って光の勢力との戦闘前によくシュミレーションをしてました!」

なるほど……元々戦闘民族みたいなノスフェルから見れば凄く便利な機能だ。待てよ、これって上手く活かせばわたしの仕事にも役立つんじゃない!!

「おおう、それは凄いな! わたしも上司に大事なプレゼン発表する前に使って

みたいよ!」

「わっかりましたあ!　いつでもお貸しますよ!　あ、でも、昼の時間帯はちょっと私の方でも使っているのですその時は無理ですよ?」

「え?　ノスフェルも本番に向けて何かの練習してるの?　それも誰に?」

「え、えっと……」

途端にノスフェルの顔色が真っ赤っかになってもじもじし始める。ノスフェルが強いことは既に他の能力を見て充分理解したつもりだけど、それでも練習無しじゃ勝てない相手がいるのかな?　数分程もじもじしてから、ようやくノスフェルが口に出した。

「それはっ……アキちゃん様です!」

「え」

「だって、今晚、共に夜を過ごすじゃないですか!　その時に、しっかりと成功出来るように色々と練習しておいた方が……グへへへ!!」

ノスフェルが自らなにを露見したのか、さっきのバナナよりも早く判断したわた

しは、とうとう恥じらいや恐怖を超えて、感情がぷつんと切れてしまった。わたしはゆっくりとノスフェルの元へ足を進める。

「ノオスウフェルウ……」

「ん? もも、もしかして早速してくれるんですか!? ありがとうアキちゃん
さっ……」

「てめえよお……やっていいこととダメなことがあんだろうよおっ! 調子に乗ってんじゃねえ!……」

「ひえっ!? アキ……ちゃん、様……?」

「第一、なんだその気持ち悪い呼び方は……ぼくに対してどの面下げて言ってんだ
ゴラアアツツ……!……!……!」

「ごお……ごめえんなしやああああい!……!」

この後むちゃくちゃ説教した。

ノスフェルはまだ知らなかった。わたしには二つの性格があるということ。決

して多重人格というわけではないが、ゲームなどをしてると夢中になって口調が変わる人や、ストレスが溜まったときにドスの効いた声調になったりする人がいるように、わたしにも過大なストレス又は嬉しい物事が蓄積してしまうと、性格が変わってしまう人間だったのだ。

どうやらわたしはストレスが溜まると、わたしの場合、男の子のようなヤクザ口調になるらしい。どうしてもこんな風になってしまったか、はっきりとは覚えてないけど、多分子供の頃からそうだったとは思う。きっと親の遺伝だろう。怒りが収まったわたしははっと我に返り、ボロ泣きさせてしまったノスフェルを見て少し複雑な罪悪感が出てきてしまった。

「ぐすん……」

「まあ、なんだ。その、わたしも……ゴメン。ストレスとか溜まると、わたしって気が付いたら男気が溢れる性格になっちゃうんだ。……変だよ、こんなの」

ノスフェルの目の不元には涙が流れたあとが付いていた。その白い目をぐしゃぐしゃにして泣き続けていたんだ。こんなにわたしのために涙を流してくれた人なんてお母さんやお父さんの次だ。なんで自分の感情をセーブできなかったんだろう。異

生獣相手に申し訳ない気持ちで湧いて居心地が少し悪くなってしまった。

「いえ……私もすみません……練習は今度から週に一度だけにします」

だめだこりゃ……。

でももう自然と怒りは湧いておらず、寧ろちょっとした嬉しさが込み上げてきたような気がしていた。

ノスフェルっていう『すぺーすびーすと』がどんな娘で、こういうことが出来て、どんなにわたしのことを愛してくれるか分かった気がする。いいや、はっきりと分かった。あんまり人には知られたくなかったわたしの悪い性格めこんなにもすんなりと受け入れてくれたし。恋人は流石に嫌だけど、ずっとずっと友達でありたいとちよっとだけ思っているわたしがいた。

「……それなら許してあげる」

さて、と。

とりあえず家事については基本的な点は大体分かってくれたようだし、次は外に出て人と会ったらどういう対応をすれば良いのか教えないと。ふとした拍子にノス

フェルが人に向かってあのダークボウルとか投げ付けたり爪や舌で近所の人を殺したり、なんてことがあったら大問題だ。人間のマナーを守りつつ、尚且つどのようにな人と接するのか早いとこビバシ鍛えとかなきゃ。でも今は真っ暗で遅いし、明日は珍しく仕事がお休みだから、今日はもういっか。

「じゃっ、今日はもう遅いから、さっさとお風呂に入って、一緒に寝よっか。ノスフェル」

「一緒に寝れる……♡。で、でも、私なんか寝て良いんですか？ 絶対私、感情を止められませんよ……」

「何言ってるの、いまベツトは一つしかないし、これから一緒に暮らしていくことになるんだよ？ わたし達もう家族みたいなものだよ。勿論そういう意味じゃないけど……」

ノスフェルは少し前までわたしに怒られて落ち込んでいたが、数秒ぐらいわたしを見つめてから出会ってから一番の笑顔になって答えた。

「……………はいっ！ アキちゃん様!!」

「じゃあ明日は朝から外に出かけるからね！ 人間のルールを学ぶためにも!!」

「りょーかいですっ!!」

たまには寝てばっかの休日をごさなくたって良いだろう。今晚わたしがノスフェルに色んな基本的な点を教えてあげて、ノスフェルがそれら全部を受け入れてくれた。ヤバイ性癖は心配しかないけれど、これほどわたしを想ってくれる人は親以外にほんっとうに今までいなかったよ。

なら、しっかりとおもてなししなくちゃ!!

しかしこの時、わたしは気付かなかった。

ノスフェルがダークボウルを空に投げ飛ばしてから、遠くのビルからずっとわたしたちの様子を見つめていた謎の少女がいたことを。

「……あの人間。俺達スペースビーストの強力な戦士であるノスフェルを服従させるとは……、

絶対に許さん!! 覚悟しておけ、人間。貴様は絶対にこの俺がブツ殺す!!!」

そこまで言って彼女はまるで幻影だったかのように一瞬でその場から消え去っていったのであった。

＃3最初の刺客、ダークガルベロスの奇襲!（この星のレリックまでは壊さないで!）

なんで？

「アキちゃん様、下がっててください!!　ぐううつ……」

どうして？

「何故だ、ノスフェル？　何故なんだ？　何故人間を守る？　はあつつ!!」

なんでこうなっちゃったの……？

「私は……、私はアキちゃん様と、この場所が好きだからあああ!……!」

時は遡ること半日前、家でノスフェルが作った朝食をとるところから物語は始まる。

「おはよーノスフェル……どうしてそんなにニコニコしてるの？」

「おはようございます、アキちゃん様！ 当たり前ですよ、だって今日はアキちゃん様との初デートの日なんですから♡ あっ、ちゃんと昨日言われた通りに早速朝食を作ってみましたよ！ 是非食べてください♡」

「だからそれは人間社会のルールを学ぶためであって、決してデートじゃないからね！……おー！ ホントにノスフェルが朝食作ってくれたんだ！ ありが……」

そう言って、わたしは思わず膠着してしまった。テーブルの上にあったのはわたしが見たこともない不気味な食べ物の数々。う、嘘でしょ……。そもそもこれって、地球上に存在する物質なの……？

「うん……、まあ、そうだよねえー。料理なんて始めてだろうし……、最初は誰だっ

て仕方ないよ……」

でもだからといって食べないのは折角作ってくれたノスフェルに対して失礼だ。わたしは早々に覚悟を決めて椅子に座る。箸を握るだけで震えてくる指をノスフェルに気づかれないように抑える。

「い、いただきます……」

やっぱり……まっつつつずううういっつっ!……!!

「どうですかあ?」

ノスフェルがニコニコで答える。気分はまるでメイドさんのようだ。でもわたしの気分は給食で脱脂粉乳を飲まされたあとみたいな感じだ。まるで切り株を食べさせられてるような味だった。なんとか吐き気を抑えながら必死に笑顔を作ってたしは答える。

「うっ……うげえ………美味しいよ、でもぐえ………まだまだだね」

うん。あとでもう一度、御飯の作り方をノスフェルに仕込んで置かないといけな
いな。

対してノスフェルはと言うと、わたしの気も知れずに、

「えー!? そんなあ……気合入れて作っただけですよ」

と可愛子振って悔しがっていた。しかしそのときに彼女の目には、何か悔しきだけではない何か……不安なものを感じさせた。

……気のせいだよ。

「アキちゃん様とデート♡へへ……」

「だからっ、デートじゃないのっ!! 全く……マイペースなんだから!」

「まあまあいいじゃないですか! さっ、次行きましようよ!」

「ちよっーと待った!! 今は赤信号、止まれだよ!!」

「えー!! でも赤は大チャンスですよ? 点滅し始めたときとか特にそうです!!」
「郷に入っては郷に従え。屁理屈は言わずにちゃんと覚えること!」

なんとか朝食を完食してひと準備をしてから、わたし達は外に出かけた。駅や公園、お店にコンビニやらと、色んなところへ巡っては満喫して楽しむ。ノスフェルに地球のルールや暮らし方を教えるためだ、でもつまらないんじゃない。

だからこれは決してデートではない……何度も言うけどノスフェルは女の子なんだし。

「なるほど！　これが公衆トイレですか……中に入ってもいいですか？」

「良いけど……」

「やりましたあ！　わーい!!　さつ、アキちゃん様も一緒に……」

「ごめん、そっちは男子トイレだよ。あと滑りやすいから走らないでね」

「えっ……っていたあっ!!　そう言うことは先に言ってくださいよ……」

「ごめんごめん笑」

とまあ、こんな風にわたし達はなんだかんだで楽しいひと時を過ごしていったのであった。そして時は流れる。

「じゃあ次はショッピングモールに行こっか」

「ショッピング……ってなんですか？　スーパーマーケットと同じじゃないんですか？」

「うーん……そう言われるとちょっと難しいなあ。とにかく大きな建物で、古今東西、色んなものが種類別に売ってあるの。食堂とかもあるんだよ」

「うわああ……。それは楽しみですっ！」

「そうだね」

ノスフェルのスマイルにわたしも笑顔で返して、ふと思った。こうしてわたしは地球のことをノスフェルに教えていて、彼女はそれを全て受け入れてくれている。けれどももしもこれが真逆の立場だったらどうなっているのだろうか。わたしはスペースビーストが群がる暗黒の世界を受け入れられるのだろうか。闇の勢力とやらに身を任すことが出来るのだろうか。正直、わたしはそんな自身はない。太陽が輝くこんな昼間から堂々しながらノスフェルは、わたしとこの星を受け入れたんだ。考えてみれば信じられない話だ。

……そういえば、以前ノスフェルが言っていた闇の勢力だの光の勢力だのって……あれって一体どういうものなのだろう。

なんで光とか闇とかは対立しているのだろうか。

——そうか。わたしは、ノスフェルのことをもっと知りたかったんだ。

そう考え込みながらデパートに着く。

「おー！　これがエスカレーターですか!!　凄い、勝手に上がってってます!」

「……ねえ、ノスフェル」

「ん？　どうしたんですか？　アキちゃん様？」

「前から気になってただけだし、闇の勢力とか光の勢力と違って一体なんなの？」

「

「えー、今それ聞いちゃいます？」

「聞いちゃいます。ほら、エスカレーターに乗ろう」

「一緒にエスカレーターに乗りながら秘密を赤裸々する……♡分かりましたっ!

じゃあ早速乗りましょ!!」

「えっ、わたし今なんか意味深なこと言った？」

わたし達はデパートの最上階を目指して、エスカレーターに足を踏み入れた。

「それでは説明します。えっと……闇の勢力にいる者はみんな暗い、真っ暗な世界、そして負の感情がある場所でしか生きられないんです」

「要するに、恐怖ってこと？」

「そうですね。反対に光はその逆。明るいとこや、幸せの感情があるところだけです。だから、お互いの住処を守護し、繁栄する為に対立しているんですよ」

「ちょっと待った。この星は明るいよ？　どうして闇の勢力のノスフェルがここにいられるの？」

「それはですね、地球には光と闇が同じくらいあるからですよ！……いろんな意味で」

色んな意味で……なるほど。確かに心の中に闇を抱え込む人達が多い。それに夜になれば光と闇は逆転するしね。

「もしかしたら私以外にも既に地球に潜伏してる異星獣達がいるかもしれませんねえ……でも、」

「でも？」

「私は何よりこの世界で生きていけるのは、他ならぬアキちゃん様のお陰です。始めてアキちゃん様の家に來てから私は暖かさと優しさを知りました。光や闇なんて関係ない。ここが私の家なんだなって」

「ノスフェル……」

「だから一生この私を下僕にして、いっぱいいっぱいやっていきましょうね♡」

「ノスフェルウ……」

最上階に降りて、付近のお店を見ながら回る。10年に一度の感動を一瞬にして壊された気分だ。憎たらしい程にキラッキラツに輝いているノスフェルの笑顔に、わたしは拳骨を与える。

「あいたっ！ 何するんですかっ！」

「なんとなく。じゃあ他にはなんかないの？」

「他にですか。そうですね……闇の勢力には異星獣ことスペースビーストの他にも、ウルティノイドという私達を使役できる闇の種族がいますよ。それに対して光の勢力には、ネクサスと呼ばれる受け継がれる光の種族や、来訪者とか言う……あれ？ アキちゃん様、どうしました？」

やば……話の途中だけど、めっちゃお腹が痛い。どうしようどうしようでしょう。やっぱ朝のノスフェルのご飯が来ちゃったんだなあ。

「ごめん……ちょっとトイレ。ノスフェル、その洋服屋さんを見て待ってて！」

話は出てから聞くよ！」

「……分かりましたあ！ 待ってます!!」

わたしは猛ダッシュで更衣室を探す。女子トイレ女子トイレ……。あった！

~~~~~

~~~~~

~~~~~

ふう、助かった……。

数分後にトイレの個室から出たわたしはふうと少し安堵してから、急いで洗面所へと向かった。ノスフェルはきつと何かしら変なトラブルを作り出してそうだし、面倒なことが起きる前に、早いとこ戻らないと。そう思って手を洗い、トイレを出た。

「やっと見つけたぞ人間、貴様に話がある」

「ふえっ……!?!」

どうやらトラブルに巻き込まれていたのはわたしの方だったようだ。

更衣室を出たわたしの目の前に、茶髪な髪の毛に右目は白色、左目は黒色。真っ黒色の時期外れな癖のある形のマフラーを身に纏い、ボロボロな紺色のユニフォームを着た高校生くらいの少女が、まるで対戦相手を探し回る飢えたボクサーのようにわたしを睨みつけていた。

なんだ、この娘のこの格好……。普通じゃない。明らかに人間じゃないよ。だってよくよく見たら、彼女の背中に尻尾が生えてるもん。

——間違いない。この娘は異生獣だ。スペースビースト

まさか話って……。

「何が目的なの……？」

その少女は足が少し震えているわたしを見逃さずに言い放った。

「ほう……貴様、俺の正体に気付くとはな。流石ノスフェルを従わせているだけはあるようだな。」

その格好じゃ誰でも怪しむよ。あと従わせてなんかない、本人がわたしと暮らしたいって言うてるから一緒にいるんだ。

「今更自己弁護をしたって無駄だ。闇の勢力の重要な戦力、ノスフェルをたぶらかした貴様を絶対に許さない……」

あ……なんか嫌な予感。わたしは目を逸らして逃げられそうな場所を探しながら後退りする。

「俺が貴様をブツ殺す!!」

やっばりいー！

「ま、待ってよ!? 話せば分かるって!!」

「人間ごときが図に乗るな。俺を怒らせるんじゃないや……ねええっ!」

彼女はマフラーの両端から火炎弾的なのを放射してわたしに襲いかかる。

「うわぁっ!?!」

間一髪で少女の攻撃を避ける。トイレの入り口が真っ黒に焦げた。流石に周りの人もこれには驚いてるよね。わたしは周りを見回した。

人々はわたし達に見向きもしてない。

……おかしい、誰も気付いてないなんて。それどころかデパートの空間が徐々に歪み始めている。何が起こってるの？

「残念だったな、人間！俺は今なあ、俺とアンタだけしかない空間、ダークフィールドを展開してやったんだ。だから貴様はここから逃げられない。ついでに言うと、焼け焦げたトイレは俺が貴様に見せている幻影だ。」

な、にそれ……つまりはわたし、閉じ込められているってこと!?! 脱出不可能じゃない！幻影って、ノスフェルが持つてる能力じゃなかった。スペースビーストって他にも色んな力を持っているんだね。てか、これってマジでヤバくない!?!

「俺の名はダークガルベロス。さあ、絶望を味わって死ぬがいい……喰らえっ！」  
ダークガルベロスと名乗る彼女はそう言ったと同時に、わたしに狙いを定めて飛びかかってくる。

「やっ、やめてえっ!!」

わたしは覚悟をして目を瞑った。

ああ……どうすれば……わたしはこのまま、死んじゃうのかな……

まだ話の続き、聞けてないよ。

ノスフェルっ……。

もう一度、もう一度あの憎たらしくて、キラキラしたノスフェルの笑顔が見たい。

見たいよ……。

グシャァツと音が響いた。とてつもなく体中が痛……くない!?

わたしは目を開ける。

ダークガルベロスの手を抑えていた彼女<sup>ノスフェル</sup>の背中があった。

「ノスフェル……?」

「ごめんなさいアキちゃん様。私は待つのが嫌いなんです……」

ノスフェルの白い目から1滴、涙が出ていた。でも、憎たらしいくらい最高にキラキラしていた目だった。

「ノスフェル……。貴様、どうして人間を守る俺がアンタを助けようとしているんだぞ……」

「……ガルベロス。君は間違ってるよ、確かにこの町は私達が住むには眩し過ぎる。けど、それ以上に……私はそれ以上に————なんだ!!」

「きゃっ!」

二人が衝突した衝撃で激しい爆発音がして、そのあとはよく聞こえなかった。でも既にその答えは知っているような気がする。

「アキちゃん様、下がっててください！」

「うん……ありがとう」

ノスフェルを信じよう。わたしを信じてくれたんだから。

「ぐううっ……」

「何故だ、ノスフェル？ 何故なんだ？ 何故人間を守る？ はあっっ!!」

「私は……、私はアキちゃん様と、この場所が好きだからあああ……!!」

わたしを殺してかつての仲間を取り戻そうとする者と、わたしを守ってかつての仲間に理解させようとする者。

ノスフェルとダークガルベロス、二人の『すぺーすびーすと』は人並みとは思えない、驚異的な速さと動き戦闘を始めたのであった……。

#4 ガルベロス、高校に通う!! (もうダークネスから抜け出したの?)

わたしの名前は古紋アキ、どこにでもいるような新人OLの女性。

ひょんなことから異<sup>スペースビースト</sup>生獣と名乗る娘・ノスフェルと暮らすことになってしまっ

た。そんなノスフェルとデパートに行っていたある日、闇の勢力の刺客であり、二人目のスペースビースト、ダークガルベロスにわたしは襲われてしまい、そんな絶体絶命の中でわたしを救ってくれたノスフェル。しかしわたしを狙うダークガルベロスとわたしを守るノスフェルという二人の異性獣が遂に対峙する結果となってしまうた。

そして今ここに、スペースビースト同士の激しい戦いが幕を開けるのであった……

!

二人の異星獣は勢い良く走り出して、人間では不可能な動きを次々に展開する戦闘が始まる。

「ぐりゃあああああ！！！！！」

「ぐぐぐ……はっあああ！！！！！」

激しい……。言葉では表現の仕様がないう。俊敏な動きで互いの攻撃が繰り出されている。普段のタランとしたノスフェルとは大違いだ。……もしかしたらわたし、本当に大変なモノが懐に入ってしまったのかもしれない。

「目を醒ませ、ノスフェルウ!!」

ダークガルベロスのマフラーの両端が猛犬の如く荒れ狂い、火炎弾を連続発射してノスフェルに仕掛ける。

「だあっ！ はあっ！ お断りするよっつ!!」

ノスフェルは火炎弾を華麗にかわしながら、いつか（と言ってもたった昨日の話なのだが）見せた赤黒い球体、ダークボウルで迎え撃つ。

一見戦況は互角かのように見えるが、自分の意思でわたしを防衛するノスフェル

に困惑を隠せないのか、ほんの少しだけダークガルベロスの方が押されている。

よし、これならもうだいじょ……。

待つて。

でも、これでいいのかな……？

本当に、これだけでいいのかな？

このまま、ダークガルベロスが倒されて良いのかな？

「……これで！ お仕舞いですうっっ！……！」

ノスフェルの長く鋭い爪がダークガルベロスのお腹を突く。

「がひゃあああっっー！！！！！」

お腹から粒子のような返り血が飛び、ダークガルベロスは呻き声を上げながら倒れ込む。その顔の様子からは今にも息絶えそうなほどの苦しさが伝わってくる。

「ぐはっ……ぐがああ……」

「ダークガルベロス、アキちゃん様に牙を向けた罪はとてつもなく重いものです。悪いけどあなたはここで死んで償ってもらいます……」

ノスフェルの爪が、上半身を起こしたダークガルベロスに牙を剥く。

このまま倒せば、わたしを殺そうとした娘はいなくなる。

でも…………でもっ…………。

こんなの……

こんなの良いはずがないっ！

戦って倒して終わりじゃない。それだけじゃ根本的に何も解決なんでできやしない、しないのよ！ 彼女の価値観や使命のために、彼女達の種族のためにわたしを襲ったことは、彼女にとっては間違っていない筈なんだ！ 例え違う種族でも……

わたし達はきつと分かり会えるはずだ！

今ここで誰の生命いのちが果てようと、誰も喜ぶことなんてできない、虚しいだけなんだ。

わたしは走り出し、ノスフェルの片手を掴んだ。

「待って！ もう辞めよう？ こんなのおかしいよ!!」

予想外の事態にノスフェルはもちろん、傷ついたダークガルベロスも驚愕している。でも構わない。今止めなきやわたしは、いやわたしは絶対には後悔する。

「何故ですかアキちゃん様……？ ダークガルベロスはアキちゃん様を……ふひゃっ!？」

わたしはノスフェルの頭を撫でた。

「ノスフェル、助けてくれてありがとう。嬉しかったよ。わたしとノスフェルは全く違う生き物なのに、こんなに温かい絆を感じられたから。……だから、さ。ダークガルベロスだって、確かに異種間の差異は大きいかもしれないけどもきつと、

分かり合えると思うの！ だから殺しちゃダメ!!」

「ず……ずるいです、アキちゃん様……」

照れるノスフェルを他所に、ダークガルベロスはわたしに問う。

「なんだと貴様……。俺はアンタを殺そうとしたんだぞ!? 目を離せば必ず殺しにいくぞ？ それでもまだ俺を許すともいうのか？」

わたしは振り向いて笑顔で答える。

「その時はその時。お互いに理解出来合うまで付き合うよ。ノスフェルと一緒にね。だからわたしは……あなたを許したい」

「人間……お前……」

「アキちゃん様、なんて優しいんですか！ 流石私だけの唯一の正妻です……」  
ノスフェル、今すぐその長い舌も一緒に口口にチャックして。わたしはダークガルベロスに手を差し伸べた。

「ほら、今日の敵は、明日の友だよ……!!」

ダークガルベロスはわたしの手を見つめる。

「俺が……俺なんかが掴んでも良いのか？　俺は闇の勢力、貴様の恐怖を喰らうモノなんだぞ……」

隣でノスフェルがニコツとして代わりに返す。

「良いんですよ。私なんかハートまで奪われてしまいましたから♡」

「……そうか、そうなんだな……」

ガルベロスは漸くわたしの手を掴んだ。

すると突然、禍々しいダークガルベロスの服装が輝きだす。

「まっ、まぶしっ……！　急に何なの!？」

「まさか……。ダークガルベロス、あなた光を？」

光？　闇の勢力であるはずのダークガルベロスが光の勢力になっちゃうってこと？

光堕ち的な？　ってそれアリなの!？　こういうのってもう少し話が進んでからなんじゃ!？

眩い光が解き放たれ、ダークガルベロスの服装が眩しくなくなった。そこにはロボロな紺色のユニフォームではない、まっ黄色に染まった綺麗なユニフォームを着こなすダークガルベロスがいたのだった。でもダークらしさは無いよね……。傷まで全て癒えた彼女はゆっくりと立ち上がる。

「ダークガルベロスじゃない、今日から俺の名前は……ガルベロスだ」

「……まさか、そんなことが……」

「改めて……よ、よろしくな、人間」

「うん……よろしく」

ノスフェルが茶化しながら謝罪をする。

「さっきはごめんなさいね、ガルベロス。でもまさか貴女が光を手にするなんて驚きですよ!」

「俺も謝る。……ごめん。それと、人間。……その、えっと……」

そしてわたしの方を見て、赤面で口をモゴモゴし始める。

「どうしたの? ガルベロス?」

「ふ……ふんっ! け、決して、俺は負けたんじゃないぞ! 次会ったら今度

こそ俺はアンタらに勝ってやる！ 絶対勝つからなあー！」

ガルベロスは逃げるように去って行ってしまった。逃げ去る彼女にわたしは言った。

「拳を振るわないものなら、なんでも受けて立つよう!!」

まっ。こういう分かち合いも、悪くないよね。

帰り道、ハプニングもあったものの、その後も十分に羽を伸ばしながらノスフェルに色々な物事を教えることができた。無事ノルマ達成ってところだ。でも空はもう夕焼け。時間とは、あつという間に過ぎるものなんだなあ。わたし達は他愛もなく話しながら歩いていた。

「あの時のガルベロス、すぐに行っちゃいましたね……」

「そうだね、……また会えるといいね」

「きつと会えますよ。ガルベロス、素直じゃないだけの娘ですから。それと……」

「それと?」

「……私、彼女から、ものすごく暖かい光を感じました。それもどちらの勢力にも属さない光……。アキちゃん様、光ってなんなんですか?」

あつ、ガルベロスは正式な光の勢力に寝返った訳ではないのね。でも、ノスフェルだって同じなんじゃないの? そう言いたいところだが、なんとなく今はやめて、代わりに違う言葉を返した。

「そうだねえ……。光って、温もりなのかな?」

「温もり……ですか。私にはまだはつきりとわかりません。少し前なら分かってたと思ってたのですが……」

彼女の白い目は黄昏ていた。なるほど。きっとノスフェルもわたしの見えないところで沢山苦労してきたんだね。

「わたしもよくわかんないよ、そんなこと。でもさ、わたしはノスフェルに感じてるよ。温もり」

「……そうですね! その内見つければ良いですもんね!! じゃあ取り敢えず、私の今の温もりもアキちゃん様です!」

「そうだね。じゃっ、帰ったら一緒に今日買ったものでも食べよっか」

「は♡♡」

AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

AAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

AAAA

「ええ……どうしたの……ガルベロス!?」

翌朝、週明け。それはいつもより早く余裕を持って会社に向かった道中のことだった。なんとセーラー服を着たガルベロスに遭遇してしまったのだ。早速遭遇出来たのはいけれど、一体これはどういうことなの!?

「こっ、これはだなっ……そ、そのお……俺だってせっかく地球に来たんだ、だから……そう! この星を調査しようと思ってだな、今日からJKとやらになってあの江抜高校に潜伏することにしたんだ!!」

「ええっー?!?!? そんなのってアリ!?!」

「別に良いだろ! いかんせん俺はノスフェルより若い体付きなんだ、生きてく

にはこれしか職がねえだろ!!」

確かに始めてあった時はガルベロスって女子高生っぽい容姿だなあー、っとは思ってたけど……。これはびっくりだよ。しかも以外と似合ってる……。可愛い。……。写真撮ってもいい?

「う、うるさい! 忘れんなよ、俺は絶対アンタ……ええっと、」

「古紋アキ。アキでいいわよ」

「よ、よしアキ! この俺、ガルベロスこと軽部<sup>かるべ</sup>露乙津<sup>ろおず</sup>が絶対に今度の期末テストでアキをぶっ倒してやるからなあ! 今に見てろよ!!」

「あっははは……」

何処から突っ込んで置けばいいのやら。取り敢えず今度ガルベロスと同じ枝抜高校に通ってる親戚の子から問題用紙でも見せてもらおうとするか……。確か、アイツもガルベロスと同年齢だし、もしかしたら同じクラスになっちゃったりして。まー流石にそんな偶然はないか。

「言っとくけどわたし、青春捨てて勉強全振りしてた人だから、それなりに強くなってきてから勝負しなさいよ?」

「もっ……もちろんだ！人間のアキが出来ることなら俺だって出来るさ！とつ、とくと怯えるがいいっ！！」

「……はいはいっ」

やはり少し恥ずかしかったのか、はたまた妙なやる気に満ちたのか、ガルベロスはそう言い終わったあとすぐにもの凄い早さでいざ高校へと走って行った。わたしは少し呆然としつつも、すぐに満面の笑みとなった。やっぱりあのとき、ちゃんと止められてよかったよかった！

「うそっ、もうこんな時間!? 折角早く出たのに……!!」

何気無く時計を確認したわたしは今日も慌てて走り出したのであった。

＃5アキのT L T社蓄生活！（ヒーロー気取りのカメラマンに付け回されてもう大変!!）

わたしの名前は古紋アキ。どこにでもいるような新人OLの女性！

ひよんなことから異<sup>スベースペース</sup>生獣と名乗る娘・ノスフェルと暮らすことになってしまった。

そんなはた迷惑なノスフェルだけど、唯一わたしの生活を邪魔することが出来ない領域がある。それはそう、わたしの仕事場。今日はそんなわたしの大変な1日を見てほしいな。

「おはようございまあーす」

「古紋さん！ あなた五分も遅刻してるわよ!!……この企業の財政を調べて売り上げをまとめてちょうだい。今日中にね」

「はい、分かりましたあ……って立花さん!! これって様々なコンテンツで莫

大な売り上げを出している大手企業の株式会社、バダイインじゃないですか!?!?

こんな大企業を1日でやるんですか!?! わたし一人で?」

「何言ってるの、当然でしょ! 今は夏季<sup>人員不足</sup>到来で誰も手が離せないんだから。翌

朝までにはマスコミに各企業の株価に関するニュースで公表する為の資料として提出しなければいけないんだから文句言わない!!」

「そ……そんなぁ……嘘でしょお……」

「頼んだわよ、こ・も・ん・さん」

「はぁい……」

うう……最悪だ。今日は職場に五分も遅刻してしまった。これだから朝の満員電車は嫌なのに。もうすぐ夏休みなんだから少しくらいは人減ったっていいじゃん! しかもそれだけじゃない、今日はたった一人であるバダイイン社の売り上げを調べあげなきゃいけないのだ。期限は今日中。パソコンに何時間も向きあうだけじゃなくて、バダイインの業者さんに直接話を聞かなければならない事案だわ。ホントに今日はずいずい……。

と、ここまで自社を貶してきたが、決してうちの会社がブラックというわけではない。わたしが勤めているこの会社・TLT<sup>ティルト</sup>は主に『自分の会社の財政状態や経営成績、株価、業務のデータを管理、計算した損益計算書にしてまとめてほしい!』とか、『メディアを始めとした会社で、この情報の資料を要するのでデータが欲しい!』といったディスクロージャー等々を行おうとしている企業間からの依頼、所謂B to Bによって仕事が成り立っている。ただしTLTは一般的には公にはなっていない会社だ。MP課の人達がそこら辺を厳しくチェックしているようだけどね。話を戻して、上述した依頼人は、ある程度四季の法則に基づいており、依頼が集中して来る時期と全く来ない時期があるのだ。春秋は顧客が少ないけれど夏冬は馬鹿多い。しかも夏季は帰省ラッシュや休暇を取る社員が多いから人員不足になりがちである。

要するにめっちゃ暇な時期もあれば、めっちゃ忙しい時期がある変な仕事なの。それでも新人のわたしでもノスフェルを養えるぐらいの給料を貰えてるからいいもんだよ。

早くも朝から沈んだ気分になり、わたしの部署ナイトレイダAのオフィスの席に荷物を置いて溜息をつく。

「はあーっ……」

「おはよう。その様子、もしかして古紋さんも1日でやれって言われた感じ？」  
席の隣から声を掛けてきた男性は、わたしより一年先輩の条井ナギサさん。今までも何度も面倒な物件を助けてくれたわたしの憧れの先輩だ。

「はい……。今日はバダインを1日でやらなきゃいけないみたいす……」

「ひえー。それはまた立花さんは随分な無茶言ったね。まだまだ古紋さんは新人なのに」

「はあい、なんとか期限の猶予は伸ばせないもんですかね」

「うーん、僕に任された二件の会社も今日中に片付けなきゃいけないみたいだし、流石に今回ばかりは無理そうだなあ……。ごめん！」

わたしは驚いて思わず声を大きくする。

「えっ!? 先輩二件もですか!?!」

「まーそこまで大きな会社って訳じゃないけどね。——でもさ、ああ見えて立花さ

んは古紋さんに期待してるんじゃないかな?」

「えっ、どういふことですか?」

「立花さんはね、いつも真面目で厳しいけれど、みんなことを誰よりも考えてるからこそああいうこと言えるんだよ。僕が古紋さんの時だった頃なんか、僕の分も文句言いながらやってくれたし、古紋さんより僕の方がもっと辛辣に言われてたよ。そもそも立花さんは本来AじゃなくてBの人なのにな」

始めて知った。いつもいつも厳し過ぎてTHE・ブラックな上司に相応しい人柄なのに、そんなに良い人だったなんて。

「そう……なんですか」

「きつとそうだよ。……じゃ、僕は立花さんに言われた企業先に行くってくるから。

古紋さんも頑張ってるね!」

「はい、条井先輩行っちゃっしょーい」

ナギサ先輩は颯爽とまとめた書類をカバンにまとめてオフィスを出て行った。相変わらず先輩は爽やかだ。わたしもいつか、あんな風になれたら。それに比べて、今のわたしは……。再度溜息が漏れてしまった。

「はあ、もうやってけないっすわ。……あつ、アキりん」

わたしと同じタイミングで向かい側の席で溜息をついた彼女の名は新谷あらたにミキ。わたしの同期で、条井先輩に絶賛片想い中なんだって。

「ミキりんも仕事量が半端ないって感じ？」

「アキりんほどじゃないけどね……ただ、」

「ただ？」

「条井先輩が行っちゃったと思うとなーんかやる気なんて出なくなっさー」

ミキはいつもこんな調子なのだ。わたしは呆れて仕事に戻る。

「……ごめん、聞いたわたしが馬鹿だった。さっ、仕事やろー」

「アキりんひっどーい!! ちゃんとわたしの話を聞いてよー!」

ÄÄÄÄÄÄÄÄÄÄ

ÄÄÄÄ

Ä:

「これでよしっ」と

数時間ぐらいパソコンに向かってデータ収集や管理をして書類を作成しつつ、バ

ダイン社の方に電話かけて双方の都合に合わせた時間帯を決めることがなんとかできた。時刻は午後一時。もう休憩時間か。わたしは一息ついてから腕時計を見つめる。

「ふう、午後二時からか」

後ろから肩をポンポンと叩かれて優しく声をかけられる。

「古紋さん。お昼、一緒に食べようよ」

「ああ、佐大さん！ そっか、もう昼御飯の時間だね。分かった、じゃあ行こっか!!」

わたしに話しかけてきたこの女性はもう一人の同期、佐大<sup>さだい</sup>リコさん。ナギサ先輩以外周囲が見えてないミキとは違ってリコは真面目に仕事をこなしているので、どうしても話す時はわたしも少し固くなっちゃう。でもでも、決して仲が悪いというわけじゃないよ！

リコはわたしの返事を聞いて不気味なほどにこやかな笑顔を作って、ただ一言。「ありがとう」

と答えた。

わたし達は屋上に移動し弁当を食べていた。わたしは弁当箱の中のハートの形をした具を見て少し呆れて吹きかけてしまう。全く、いいって言ってるのに勝手にノスフェルは毎日毎日弁当を作ってくるんだから。アンタはわたしのメイドか。愛が無駄に重いよ。ノスフェルは異星獣だし、味覚も不十分だから最初は本当に吐き気を催しがるくらい不味かったんだけど火を重ねる内に腕が上がってきて、いつのまにかとても美味しくなっている。悔しいけど、わたしのより美味しいよ、コレ。はああ……とろける〜。

「古紋さんの弁当、前まで目の保養にも悪かった見た目だったけど、最近のは本当に美味しそうだね。羨ましいよ」

ははは……わたしじゃないんだけどね。それに若干デイスられてる気がするし。  
「あ、ありがと。佐大さんの美味しそうだよ」

「そうかな……でも私、自分で弁当作るのが苦手で、いつも料理得意の弟が作ってくれてるの。ねえ、古紋さんのようにわたしも上手になりたい。その弁当の作り方

教えてよ」

額から冷や汗が垂れる。

「あー、これわたしが作ってる訳じゃないんだ……」

「へー。誰が作ってるの？ 家族？」

「そっ、それは……企業秘密」

わたし達はクスツと笑った。するとそこからよろよろとぶつきらぼうにたった一人の男性社員が屋上の扉を開けてやってきた。彼はわたし達と少し離れた椅子に座り、弁当を取り出そうとしている。しかし、がっぽりと落として、中身が飛び散ってしまっていた。

「くそっ……なんなんだよ……」

ブツブツ言いながらおどおどする彼は沢海<sup>さわみ</sup>ヒロキ。失敗ばかりする癖にひん曲がっているMP課のダメダメ社員だ。会社にそういう人は一人か二人はいると聞くまさにそんな感じの人。正直、こういう人とはあまり関わりたくない、ちょっと苦手だ。ダメダメ、何か違うこと考えなきゃ。違うことちがうこと……じがうことじかんこと時間こと………時間！

「はっ！」

慌てて時計を見る。もう一時半じゃん！ やっぱい！ バダイン社に向かわなきゃっ!!

慌てて弁当箱を片付ける。

「ごめん佐大さん、これから行かなきゃいけないところがあるんだった!!」

「そっか、もっと話したかったけど残念。……あ、そうだ古紋さん。これあげるよ」  
そう言ってリコが手から出したのは青色のマスコットキャラの様なキーホルダーだった。

「なにそれ？」

「ガンバレクイナちゃん。私が作ったお守りなの。古紋さん、最近仕事大変そうだからさ」

「そんな、わざわざ……佐大さんありがとう！」

嬉しい気分になり、わたしは気合を再度入れ直そうとした瞬間だった。思わぬ発言をリコがしてきた。

「古紋さん、私好きだな。恋人になってあげたいよ」  
えっ

リコはいつになく真剣な目つきではっきりと言い切った。わたしは暫く硬直する。

やがてリコがいつもの表情になって笑った。

「なんてね、冗談だよ。ほら、行かないと」

その一言で我に返ったわたしの目が覚めた。

「あっ、そ、そっそうだ!! 行ってきます!」

なに動揺してんだよ、わたし。



なんか変な奴がわたし目的でスタンバってた…………。

格好からして、如何にもカメラマンって感じの男だ。週刊誌？ マスコミ？

どちらにしても面倒臭い。なんとしてもこの会社やわたしの素性をこんな男にバラすわけにはいかない。MP課にでも連絡しようか。いや、まだそこまで深刻じゃない。大人の対応でさっさと振り払おう。

「あの、我が社にご要件がありましたら、受付にて連絡を頂けると……」  
そう言い放ってさっさとバダイン社に向かおうとするも。

「いや！ 俺はアンタに用があんだ。頼むから取材させてくれー!!」  
うう……。ぶっちゃけ面倒臭い。

「けっ、結構です！」

わたしはとにかく立ち止まらずに距離を取りながらそう言った。しかしながらカメラマンも中々しぶとい。早く諦めてよ。

「ほら、最近さあ。物騒な世の中でしょ？ だからこそ真実を知りたいんだよ、俺

も」

「なんの話のことだが知りませんが、わたしは忙しいんです！」

「分かってる！　ちょっとで良いんだ！　だから取材させてくれ!!」

「いやですよ！　予定に間に合わなくなります」

「これは世界を救う為なんだよ、アンタだって平和が一番だろ？」

「そりゃあ平和が一番ですけど、世界を救うのがわたしと話すのと何の因果関係があるんですか」

「いやいや本当に頼む！　一回だけでいい、だから取材をさせてくれ!!」  
「結構ですって……」

なんだコイツ……すつつごいめんどくさああああああい!!!!!!!!!!!!!!

「はぁ……はぁ……やっと一日が終わったぁ……」

今日は本当に疲れた。なんとかカメラマンを切り抜けてバダイン社からコンテンツ別に売り上げに関する情報提供をする話でオッケーとデータをもらえた。それから会社に戻って(まだスタンバイしていたあのカメラマンを上手いことまいた事と言うまでもない)資料をまとめあげる作業を終わらせて、残っていた上司に提出する頃には既に定時時間を遥かに上回っていた。なんだかんだ言いながらも、上司はわたしのことを褒めてくれた。

少し照れ臭くもデスクに戻ったら、ちょっと前に資料を提出したナギサ先輩と目が合い、「ほらな」ってウインクしてきた。赤面になってわたしは申し訳なく小さな会釈をして、そのあとナギサ先輩とミキリんとで一杯飲みに行った。

「ぷはー！ キンキンに冷えててさいこうですわね!!」

なんだかんだ言って、わたしはこの仕事が好きなんだ。

大人になるって、子供みたいに甘えられなくなるってことだとわたしは思う。

それってとっても辛くて、大変で、挫けることなんだよ。

ましてや本望でやってない仕事でも何十年も続けてたら……。

けれど、仕事や何か夢中なことに生き甲斐を持てていれば、人はちゃんと大人になって、いつか人生で感じたことのない幸せを掴めるようになると思う。

わたしは決して逃げない、例えどんなに辛い仕事がまた来たとしても。そう心から強く実感したのであった。

……とは言え、流石に今日は色々と溜まってきてるせいか、もう酔いが回ってきた。酔い潰れる前にすぐ寝ようとしよう。家に帰ったわたしは扉開けて部屋を見た。

「ただいまぁ……あっ」

わたしはノスフェルの様子を見て絶句した。ただでさえ疲労が尋常じゃないと言うのに、余計なストレスが一気に込み上がってくる。

「あっ……あっ………んん………ビーストアキちゃん様あ!!………あっ」

わたしは乱暴に荷物を投げて、拳をピキピキ鳴らす。全てを察したノスフェルは青ざめて後退りする。

「ノスフェルくんよお………」

「あ…アキちゃん様……。こ、これは違って………そんなことよりかつ、家事はちゃんと終わらせましたよ………」

「だーまーれ。ぼくのビーストヒューマンで、アンタはなにやってんじゃあああああああああ!?!?!?!」

「ひいっ………ごめんにやしあああい!?!?!?!」



＃6 光の勢力・ネクサス-の進撃! (ウルトラマンとは違うらしい!?)

わたしの名前は古紋アキ。どこにでもいるような新人OLの女性!

ひよんなことから異<sup>スペースビースト</sup>生獣と名乗る娘・ノスフェルとわたしは一緒に暮らすことになってしまった。

そんなノスフェルって確か『闇の勢力』って所に属してるらしいけど……、逆にそれと敵対している『光の勢力』って一体どんなものなんだろう? 知りたいよ  
うな、知りたくないような……。

「もおお……またアンタなの……」

「まあまあそう言うな、今日こそは取材させてくれよ! な?」

はー、どうしてこんなことになってしまうのかなあ……。

状況を整理すると、今日の仕事は珍しく定時前に終わった。余裕を持て余したわたしはノスフェルにメールである約束をした。なんだかんだでノスフェルも人間社会に溶け込み始めているのだ。数週間前、わたしが昔使っていたスマホを譲渡してあげたら、なんともう完全に使いこなせるようになっていた。ちよつとちよつと、そんなずば抜けた学習能力ずるくない？ ……そういえばノスフェルも以前ビースト達は振動波を利用して情報を共有するとかなんとか言ってたし、まあ当然と言えば当然なのかな。それで話を戻して、普段から勝手に晩ご飯を作ってしまうノスフェルに代わって、今日こそはわたしが作るから任せてっ、と返信してからスーパーに寄って食材を買い終わってかわたしの目の前にはいくつかのカメラマンが待ち伏せていた、という現在に至るわけなのだ。

全く……なんなの、このストーリーカーは!!

「そう言えば、ちゃんと自己紹介出来てなかったよな。俺の名前は姫<sup>ひめ</sup>隼也<sup>しゅんや</sup>。世の中の理不尽な不正を全部暴く正義のジャーナリストってところかな。よろしく」

あーもう！ 早く帰る予定だったのに……めんどくさい!!

「別に聞いてないですしよろしくしませんから……。はあ、分かりました。要件なら聞いてあげますからさっさ言ってください、姫さん」

そう呼んだら姫さんは顔を少し赤らめてすぐに言い返す。

「ひっ、姫さんって言うな！……コホン、それで最近この街を騒がしている女性達がいるんだが……古紋さん、何か心当たりはあったりしないか？」

「なっ……やはりわたしの名前知ってたんですね……」

「だから前言っただろ、俺はアンタに用があるんだ、と。それで古紋さん、結局どうなんだ？」

わたしの脳裏にノスフェル、そしてガルベロスが過った。いきなりそんなことを聞かれたから少しビクツとしちゃったけど、表面に出さないように心拍を整えてから答える。

「……知らないけど」

「そうか、なら良かった。アンタは最後の希望だからな」

最後の希望？ ますますこの人が分からなくなってきた。怖い、通報した方が

いいかな……。

「……あの、最後の希望って」

「いや、それはこっちの話だ。まあそれでな、俺が言うその女性達、実は人間じゃねえんだよ」

「げっ……」

まさか。

「ん？ どうした？」

いや、そんなはずは無いよね。

「い、いえ。なんでも無いです……」

わたしは何かとてつもない嫌な予感に襲われていた。それもそのはず、ノスフェルやガルベロスの様子を見ていてわたしは、姫さんが言う『彼女ら』異星獣が明るみにはならないだろうと勝手に信じ切っていたからだ。こういう場合、姫さんみたいな人には何か漏れてしまうのは非常に良くない空気が来ている。いつの時代も、マスコミとは危険な存在なんだ。TLT社に入ってからより一層痛感するようになった。

……ってことはこの状況、つまり姫さんはスペースビースト達に関する何かを掴

んでしまった、ってことだよ。もしやノスフェルやガルベロスがわたしの知らないところで何かやらかしたとかじゃないよね……。額の汗が止まらない。

それに、始めてノスフェルと一緒に出かけた時に、既に他の仲間が潜伏しているかもしれないと言ってたし、他の方が何かやらかしたとかなんじゃっ……？ わたしは平常心を必死に保ちながら聞いてみた。

「へ、へえ。じゃあそれって何なんですか？」

むう……。隠すのって苦手だ。わたしのわざとらしい演技を姫さんがジッと睨んでから答えた。どうやら姫さんは予想以上に『彼女ら』のことを知っていたようだ。「ああ。そいつらの名は宇宙からやってきた異生獣、スペースビースト。人間の闇を喰らう悪魔さ……。一見嘘みたいな話なんだけどな」

「どおっ!! どうしてあなたがスペース……。あ、いえ…あの、」

嘘……。わたし以外がスペースビーストに出会ったとしても、まさか自分以外の人間がスペースビーストについて知っているなんて……。思わず声をあげてしまった。しかも姫さんの言動からすると、ノスフェルが属している『闇の勢力』についても何か知っているようだ。わたしは姫さんにバレないように詮索してみる。

「あの……どうして姫さんはそんなに詳しいんですか？」

「だから姫さん言うな！　ったく。信じられねえ話なんだが、実は俺……」

そこまで言いかけたところで姫さんは遠くに何かを発見した素振りを見せて、顔色を変えた。すぐにわたしの手を握って走り出す。

「きゃっ、急になんですか!!」

「良いから！　とにかくここを離れるぞ!!」

いつものヘラヘラした感じの姫さんとは打って変わって真剣な眼差しで言われ、つい引き込まれてしまった。わたしは抵抗せず、姫さんに引っ張りられながら人気の少ない通りへと駆け込んで行った。

まるで何かから逃げるように。

……しかし余りにも姫さんの足が速い。まるでジェット機に手を持ってかれた気分だ。わたしの足に疲労が一気に蓄積してくる。

「ちょっと！　速すぎませんか？　少しゆっくり走ってくださいってー!!」

AAAAAAAAAAAAAAAA

AAAAAAAA

AA

わたし達は人通りが少ない通りの中で足を止めて、しばしの休憩を取っていた。

「はあ……………はあ……………一体全体何がどうなっているんですか、姫さん」

「だから姫さん言うなって……………奴等、ビーストが近くにいたんだ。それもアンタを狙っていてな」

「ビーストが!? そんな!」

すぐにわたしは必至に辺りを見回す。しかしそれらしい人なんてここにはいない。

ノスフェルは家で家事をしつかりやってくれてるはず、ガルベロスは時間的にまだ学校だろう。

どうやらわたしにはビーストの体質があるのかもしれない。じゃあ今度は一体誰が何の目的でわたしを狙っているの? 刺客……………またガルベロスみたいのが来るってこと?

でも、それならばまた和解したい。仲良くなりたい! 種族は違えど、仲良く

なる道はきつとあるはずだもん。

「……古紋さん、お前本当にもうビーストに出会ってたりなんてねえよな？ さっきから妙に反応がおかしいし」

ギクっ……マズい、ここでバレるわけには。必死に話題を変える。

「いえいえわたしは別にそんなつもりじゃ！ ……でも姫さん。もしですよ、もし仮にそのスペースビーストがいるとしても、別に良いんじゃないんですか？ わたしは分かり合えると思います」

姫さんは険しい顔で答えた。

「そんなことは絶対にあり得ねえ。奴等は情のカケラも無い、己の勢力の為なら容赦無く人間の恐怖ごと食い殺すんだぞ、だから俺はそいつらを狩っている。一匹も残らずな」

「狩る……？ 彼女が、彼女達に情のカケラもないなんて、そんなの……!!」  
違う。絶対に間違ってる。

わたしはノスフェルとガルベロスとの短いけれど深い出来事を思い返す。

わたしと出会って、少しずつだけど確かに彼女達は変わった。

絶対に人間と、わたし達と仲良くなれる。

たとえ闇の勢力に属しているからって殺すなんて……、絶対に駄目なんだ!

姫さんを、わたしが止めなきゃ!!

「狩るなんて、そんなの良いはありません! きつと彼女達とだって分かり合えますよ!! きつといい子だっているはずなんで……きやつ!?!?!」

わたしが言い切る前に、両足に突然にゆるにゆるした何かに触れた感触を感じ、恐る恐る足下を見る。

へぐちよお……べっちゃあ……」

「ひいっ!」

わたしの両足に触手のような何かが絡みついていた。うへえ……気持ち悪い……。徐々に上半身目指して侵食してくる触手。わたしが驚愕と羞恥心に見舞われて思考停止して間に触手が伸びてきた先へと引っ張られていく。

「なっ……なにこれ……姫さん!」

「マズい! 古紋さん、早くこっちに!!」

暗い路地裏にいる何かにう引き込まれそうなわたしに姫さんが手を伸ばす。

「助け……いひいっ!!」

本当にこのままじゃ捕まりそうだ。わたしは例え姫さんであろうと迷わず掴もうとするも、足が思うように動かせない。更にその両手から腕までにも新たな触手が絡みついてきた。

ヌメヌメした感触がダイレクトに伝わる。

「きゃあっっ! やめてえっ!!」

「古紋さんっ!!」

姫さんの助力も虚しく、わたしは触手の主のところまで引っ張られて遂に捕らわれてしまった。全身に触手が絡み付き、体力が座れていくような目眩を感じた。

「あふあっ……!! もう、らめっ……」

ううっ……! 最悪な破廉恥だっ……!! 触手の主は姫さんに向かって甲高い声で叫ぶ。

「ネクサス……今度こそ貴様を殺す! 今こそ我が同胞の恨み、はらさせてもらうわよ!!」

触手の主、その正体はやはり少女のものだった。つまり、彼女も異星獣……って

!! 　　なんで桃色のスケスケコートをはばはばすっぽんぽんのまま着てるのよ!

完全にアウトだよ!? 　　他には両腕が触手になっていて、わたしの身動きが一切取れないよう完全に拘束している。おまけに身体中が水分出てきているようなヌメヌメした気色悪い感触に見舞われていた。マズいマズいマズい………色んな意味で、このままじゃわたし死んじゃうよ!!

「ペドレオン、それなら正々堂々と俺を殺れよ! 古紋さんを放せ!」

「いやあねえ。アンタを倒すのに手段なんていらないわ!」

姫さんのことをネクサスと呼んでいて、姫さんからはペドレオンと呼ばれている彼女もスペースビーストでしょうね。きっと既に姫さんが狩った複数の仲間達スペースビーストの仇をとるためにわたしを狙ったんだ。

「さあて、ネクサスの餌食として捕まってもらったメスをどうしてやりましょうかねえ」

触手がデリケートなところまで侵入してくる。

「あはあっ!! ちよっ、やめてっ………!!」

ほんとにこれ以上はマズいから！

この状況、流石の姫さんも手出しが出来るわけ無いし、そもそも姫さんは人間でしかも男性だ。異生獣である彼女なんか勝ち目なんて無い。男の前でこんな目には会いたくなかった。気持ち悪い同人誌の展開なんかわたしの身には起きる筈ないと信じて疑わなかったちよつと前のわたしを返して……。

もうおしまいだ。全てペドレオンによって晒される。どうにでもなれ。わたしは覚悟して目をつぶった。これじゃあ和解どころじゃないよ……。

助けてっ……ノスフェル……！！！！

『ジュアツツ!!』

「ぐわあああつつ!!」

突然勇ましい声が響いたと思ったら、今度はペドレオンが悲鳴をあげて触手が全て解けてしまった。何が起きてるのか分からないままわたしは転がり落ちる。

「えっ……?」

わたしは目を開けて状況を確認する。

そこには、さっきまで姬さんがいた場所に赤色の宇宙人……みたいな、人間のようで人間じゃない何かが立っていた。もしかして、また新しいスペースビースト!? 「おのれネクサス……今日こそ貴様を殺してあげるわっ!」

ペドレオンが触手から火球や電撃を放ちながら宇宙人の元へと突撃する。対して赤色の宇宙人は微動だにせずにゆっくりと前進する。

ペドレオンと戦ってる……もしかしてこっちは良いビースト、なの……?」

『ジェイヤアッ::三』

「うわぁあぁっ……」

赤い宇宙人は素早くペドレオンの急所へと回り、躊躇せずに飛び蹴りをする。素早い動きに翻弄されてペドレオンは倒れ込んだ。

「おのれっ……絶対に今日こそは貴様を倒して見せるぞ……ネクサス！」

ネクサス……。そう言えばさっきから聞くそのワード、前にどっかで聞いたことがあるような……？

くそれに対して光の勢力にはネクサスと呼ばれる受け継がれる光の種族や、来訪者とか言う……

思い出したっ——。腹痛が酷くてすぐには思い出せなかったけど、確かノスフェルが説明してた光の勢力にもそんな感じの名前が——!!

『俺もだ、一氣に決めさせてもらうぞ。ハァッ!』

どこかで聞いたような声調で喋る赤い宇宙人、もといネクサスはそう言いながら右手を高く掲げる。不思議なことに、辺りにオレンジ色のモヤモヤが立ち込めて、以前ガルベロスがわたしにやったような変な空間と似た感じな状況へと徐々に変わっていった。

わたしだけで無く、ペドレオンも驚きを隠せない。

「これは……」

『メタフィールドを展開した。これでお前たちスペースビーストは完全に現実世界から切り離してやった。それと、このメタフィールドにはスペースビーストの体力を徐々に削る効果もあってな』

「なにっ!? ネクサス……絶対に許さんっっ!!!」

ペドレオンが触手を伸ばしてネクサスの動きを封じようと巻きつける。

『ジュワァッ!』

しかしネクサスはいとも簡単に触手を破り、攻撃態勢に入った。ペドレオンの触手は吹き飛び、苦しそうに喘ぐ。

「ぎいやあっ! うぐぐ……そんな……アタシの触手があ……」

『これでトドメだ……』

「ちょっと……」

待って。殺すなんて駄目。

やめてえっ！

『ジュウウワアッ……』

ネクサスはペドレオン目掛けて両腕をL字に組んで破壊光線を放った。

「ぐぎゃあ！……うっ……うぐっ……」

ペドレオンに見事に命中し、苦しそうに倒れ込む。

「そんな……こんなこと……」

わたしは思わずペドレオンの元に駆け寄った。せめてペドレオンの最期を見届けてやりたい。

「ペドレオン、だいじょお……」

ネクサスがわたしに向かって叫ぶ。

『下がれっ!』

「えっ?」

「ぐう……お前だけでもおっ!!! 死ねええっ!!!」

ペドレオンはわたしを巻き込んで自爆しようと襲い掛かる。

「ひやあっ!」

大きな爆発が起こった。

『だから言っただろ、スペースビーストは容赦無く人を殺すって』

わたしはネクサスによってお姫様みたいに抱きかかえられていた。あの一瞬の出来事でも、素早くわたしを救助して爆発から逃れていたのだ。ネクサス……ペドレオンが姫さんにそう言った時から少し引っかかった。だけど今ので話し方でようやく誰なのだが察したわたしは恥ずかしめに小言で返す。

「だからって……彼女を殺す必要無かったじゃないですか……姫さん」

ネクサスは人間の姿へと変える、というより戻ったって言うのかな。予想通り、その姿はやっぱり姫さんだった。

「……分かってんなら姫さんって言うな。女々しくて嫌なんだよ……。まあいい、これで今回の任務は果たせまし」

「任務？　もしかしてあの娘を殺したことなんですか!?　そんなの絶対良くありませんっ！……！」

「落ち着きなって古紋さん。スペースビーストは凶悪な存在なんだぜ。人類にとっても、ネクサスにとってもな」

「人類とか、ネクサスとかそう言うのじゃなくて……、なんかおかしいと思います!! だからネクサスだからって……ところでネクサスって何です?」

わたしは今までずっと疑問に思っていたことを姫さんに聞いた。

「……おいしい。ネクサスってのは、奴等、闇の勢力って言うんだけど、逆に俺達  
は」

「光の勢力、ですか?」

「分かってるじゃんか。そつ、ネクサスってのはその光の勢力の戦士達のことさ。ネクサスは正義のためにビーストに立ち向かう。だがこの地球では身体を保たせることが出来ねえ。俺のように選ばれし人間と融合して、受け継いだ力で戦ってるってわけ。どうやら俺と融合したネクサスはジュネッスつ言うみたいだけど……」

「ちょっと待って! 正義とか言いながら彼女達を殺すのは全然理由になってないわ! 命はなによりも大事なんですよ!!」

「いやいや古紋さん……さっきのペドレオンで分かったっでしょ? 光こそ正義、闇は悪。それが一番重要なポイントなんだぜ。そこに古紋さん、アンタが中心となっている」

何言ってるの、わたしはただの人間だよ。

「わたしが中心……？　もっと意味わかんないよ」

「まーその話はおいおい。いいか、古紋さん。これからアンタにはたくっさんの闇の勢力の刺客が襲ってくるぞ。だからこれからは俺がアンタを守る」

「はっ……これから彼女達すべーすびーすとがもっとわたしのところへ……？」

真偽がどうかは定かではないが、光の勢力である姫さんが嘘つくはずも無いか。  
「そうだ、だから俺が来たんだつこと。奴等は危険だ。絶対にビーストに気を許さんじゃねえぞ……」

「だから姫さんは今日までしつこく付けて来たんですね……でも……」  
「でも？」

うーむ……。ただでさえ大変な毎日なのに、もっと大変なことになった。姫さんがわたしん家にまでこっそり着いてこないことを祈るばかりだ。わたしは光とか闇とかよく分かんないけど、本当はみんながみんな仲良くなれると思うんだ。無惨に散ったペドレオンのためにも、その意思を持ち続けるべきなんだろう。

——それに、わたしにはノスフェルがいる。絶対にノスフェルと姫さんは出会わ

せては行けない。そんな気がした。寧ろそんな気しかない。折角仕事帰りと言うのにこれから違う意味でもっと仕事が増えそうで辛い。

それにつ……。わたしは少し顔を赤らめて言った。

「姫さん、いつまでわたしを抱きかかえてれば気がすむんですかっ!!」

「あっ……。ゴメン………」

「はあ……。ただいまー。ノスフェル、掃除とかちゃんとやった?」

「もおー遅いですよ♡アキちゃん様! わたしを誰だと思ってるんですかあ?」

「誰ってそりゃあ……。おっ、ホントに家事やってる。ありがとうノスフェル!」

「げへへー♡もっと撫で撫でしてください! わたし頑張ったんでぐふえつつ!!」

「調子に乗らないっ！」

「全く、アキちゃん様は素直じゃないんですから♡アキちゃん様、早く夜ご飯を作ってくださいね♪」

「うん！……って言いたいところだけど、ゴメン。わたしの負けだ、今日は色々疲れた……」

「あらっ！ やっぱりアキちゃん様には私がいないと駄目みたいですっ♡♡  
良いですよ、※今※日※も※私が作ってあげますからっ！！」

「く……屈辱ッ……!!」

何故だかはよく分からないけど、どうやらわたしは光と闇、両方の勢力に目を付けられてしまったらしい。

どっちに着くかなんて言われても今は仕事のことでもいいっばい。わたしはすぐに答えは出せない。でも、今ぐらいはまだ出なくてもいいよね。わたしのことはわたし自身で決めればいいだけなんだから。

＃7 光と闇の驚愕の正体!? (ワーニング!影が襲ってくる!?)

私は愛を知らなかった。

私は愛することが分からなかったの。

でもね、古紋さん。あなたのお陰なんだよ。

あなたにあってから、私は心が毎日熱くなる。

ずっと一緒にいたい。絶対に離したくない。誰にも渡したくない。一つになりたい。  
い。

この気持ちは嘘じゃない。

古紋さん……、古紋さん……、古紋さん！

私達はもう運命の赤い糸で結ばれてるんだよ。

だから待っててね、古紋さん。……いいえ、

アキちゃん。

「もおう！　なんでこんなことになってるのよー!!」

わたしの名前は古紋アキ、どこにでもあるような新人OLの女性！

ひよんなことから異生獣と名乗る娘・ノスフェルとわたしは一緒に暮らすこと

スベースピースト

になってしまった。そんなノスフェルと敵対する光の勢力であるネクサス。その正体はなんとも付け回してくるカメラマンの姫さんだった。ってもう！　そんなこと思い出してる場合じゃない！　なにがなんなのよー!!

『伏せて！　古紋さん!!』

ネクサスの姿になった姫さんがそうわたしに叫んで前方に走り出す。言われた通り、わたしは迫りくる攻撃から避けようとするが、間に合わない。間一髪、ネクサスが攻撃を防いでくれたが、その影響で大きな爆発が起きる。思わず尻もちを付い

てしまった。そして爆発した上方から何かが現れる。その容姿を見て、わたしは思わず叫び声を上げてしまう。

「きゃああっ!!」

やはり、その正体は少女だ。それも昆虫のような鎧を纏っている。そう、異星獣

スベースビースト

だ。や、やだ……。虫とか苦手なの!!

「無理無理無理!! わたしあ言うのホント無理! しかもなんかGっぽい  
しいい!!!!!!」

『落ち着けて古紋さん! その、なんだ……幼い頃なら虫とか苦手じゃないも  
んだろ?』

「確かにそりやそうだったかもしれないけど、無理なもんは無理なんですうう  
う!!!!!!」

『あらあらあ。私のことこんなにも夢中になってくれてえ、私どうにかなりそうだ  
わあ。ネクススウ、同胞達の無念を今ここで終わらせてもらおうわよお?』

「……バグバズン。言いだろう、望むところだ!」

ネクスス、つまり姫さんからバグバズンと呼ばれるビーストが激突する。素早い

格闘戦が次々と目の前で展開されるけどそんなことしつかりと見る余裕なんて虫嫌いのわたしには微塵もなく、ピエピエ言いながらひたすら逃げ回るしか出来なかった。仕方ないよ……。というか！　なんでまた異星獣の刺客に襲われなきゃいけないわけ!?　それも出勤中に！　しかもわたしの大きらいな虫みたいな格好で来る必要ないじゃない!!　前回あんなこと言っちゃったばかりだけど、虫っ娘と仲良くなるうなんて無理無理!!　絶対嫌あああああ!!!!!!

『じゃっ、やっぱ殺るしかないよな!!』

そう言うとき姫さんは前回のペドレオンを倒した時と同様、両腕をL字に組んで破壊光線を放とうとする。はっと我に返ったわたしは虫という恐怖に体が震えつつも、勇気を振り絞ってネクサスに向けて近くに落ちていた小石を投げつける。

「やっぱり、そんなこと、ダメですよ!!」

小石はネクサスに命中し、姫さんは動揺する。しかしその一瞬をバグバズンは見逃さない。鋭い爪をギリリと輝かせる。

「いただきます!」

爪がネクサスの足を突き刺す。その攻撃に傷付いて、姫さんは喘ぐ。

『グハアアッー!!』

「あつ、ごめんなさい姫さん……」

『はあ……はあ……だから姫さん、言うなつての……』

「あらあらあ。仲間割れなんてゾクゾクするわあ! もう、ムラムラさせないでよねえ?」

そうバグバズンが勝ち誇ると彼女の尻尾がわたしに絡みついて拘束する。尻尾に付いていた口から舌を伸ばしてわたしを舐め回す。わたしの全身に寒気が巻き起こる。

「いやああああああああっっっー……!!!!!!」

「いい反応だわあ。その調子でもっと私に恐怖の音を聞かせてよお、美味しいんだぞお?」

私の脳内がフリーズし、パニック起こしたくてもきつく尻尾に縛られて身動きがとれない。バグバズンは自身の爪で歯を掃除しながら羽を羽ばたかせる。ダメ……このままじゃ、わたし……。そこにネクサスが立ち上がって、腕を十字に構えて小型の破壊光線を放つ。



貼るよ」

「いや、このくらいかすり傷さ。それよりそろそろ時間、ヤバイんじゃないか？」  
姫さんが腕時計を見るような動作をする。それを見てわたしは慌ててスマホを開く。はわわ……もうすぐ会社が始まっちゃう!! わたしは慌てて鞆を持って立ち上がった。

「本当だ! ごめん姫さん、わたしもう行かなきゃ!!」

慌てて数歩走り出してから、わたしは後ろを振り返ってもう一言姫さんに言った。  
「……あと、今日は助けてくれてありがとう!」

お礼は言わなくちゃだもね。蝉が鳴き止まず、全国の学生なら夏休みを満喫してきる真っ只中であろうこの猛暑日と汗を垂らしながらわたしは全速力で再び疾走し始めた。姫さんはわたしの後ろ姿を見つめて、ちょっとだけ照れ臭そうに呟いた。

「感謝なんて絶対されなと思うってたけど……流石古紋さんだな。光の長さんが眠っていることだけはある」

AAAAAAAAAAAAAAAA

AAAAAAAA  
AA

結局始業には間に合わず、漸くTLT社に付くや否やわたしの部署、ナイトレイダAの課長である若蔵英里わくらえいりさんからこっぴどく叱られてしまった。普段は温厚なひとなのに。きつと夏季の人手不足で少しイライラしているんだろう。わたしは溜息を吐きながら仕事を始める。すると隣の席からクスクスと笑い声が聞こえた。

「ふふっ、古紋さん。気にすることなんてないよ」

「佐大さん……。そうね、メリハリ付けないといけないもんね。ありがとう」

「良いのよ。だって私、古紋さんのこと愛してるんだから。始めて会った時から」

リコの言葉に心がゾクとする。わたしは慌てて笑顔を作って言葉を返した。

「や、やだなあ。また冗談はやめてよ。ちょっとそっちの毛の人かと本気で思っちゃったじゃない」

いつもなら笑顔で「なんてね」ってリコは返してくる。返してくるはずだった。でも、今日のリコは何かがおかしかった。

「どうかしらね。さっ、仕事も溜まっているんだし、作業再開しましょ」

「……うん、そうだね」

仕事に再開するも、何かいつもと違うと感じる。でもそれが一体なんなのかは分からない。分からなくてもその違和感はずっと残り続ける。わたしは本能的に何かそう感じていた。警告なのか、さっきからずっとわたしの体内にサイレンが無情に鳴り響く。うーん。わたし、どうしたんだろう……。徐々にそれは腹痛に変わり、やがて我慢の限界が近づいて来たわたしは女子トイレに向かった。

部屋を出た部署では、その様子を見て不思議に思ったナギサ先輩がミキにヒソヒソ声で話す。

「今日の古紋さん、どこか調子悪そうに見えない? あんなに遅れてきたり、突然トイレ行ったりして……。もしかして古紋さんって……」

「えっ!?　じょじょじょじょ条井先輩イイイ!?!?!?!?!あつ、ははっ、アキりんはきつと女の子の日なんじゃないかなーなんてね……」

「あー、なんかゴメン」

「せっ、先輩!?　違うんです、ただの推測ですからあー!!」

そんなやりとりをしていたら、リコは立ち上がって二人に言った。

「私、古紋さんの様子見てきます」

「あ、ああ……ごめん」

リコは無言でアキに続いて部屋を出る。残された二人は不思議に思うも、すぐに仕事に再開したのであった。しかし、そのときのリコの顔は終始、アキと喋っている時よりも何倍も冷血で、目の色にハイライトのような光が無く、無表情であった。

「はぁ……わたし、一体どうしちゃったんだろう」

トイレで用を足した後、洗面所で手を洗いながらわたしは鏡に映る『わたし』を

見つめる。

わたしって一体なんなんだろう。

ある日たまたまノスフェルと出会って、一緒に暮らすことになっちゃって。

それでガルベロスに襲われたりしたけどちゃんと和解して。

そしたら今度はネクサス、姫さんに付け回されたり助けられたりして。

同時に異星獣の刺客たちがわたしを狙い始めるようになって。

最近、わたしは自分のことがわからなくなる。最早全てが単なる偶然とは片づけられない。姫さんはわたしのことを光と闇の勢力との戦いの中で中心に立ってると言ってたけど、そんな記憶なんて覚えてもない。それともわたしには何か、本当の別のわたしがいるのだろうか。もしわたしの身に何かがあるのだとしたら、それは一体何なのだろう。

何も分からない。さっきわたしの中に響いたサイレンみたいな気分も、何もかも。

「あーもう! 何なのよ、このモヤモヤする気持ち……」

「それはね、恋って言うのよ。古紋さん」

「うわあっ!?! さ、佐大さん!?!」

いつの間にかわたしの真後ろにリコが立っていた。びっくりして声が出る。

「ど、どうしてこんなところに……」

「そんなことはどうでもいいの。それよりさ、古紋さん。誰もいないんだし恥ずかしがらずに私のこと、リコって呼んでくれても良いんだよ」

「別に恥ずかしいわけじゃ……」

「照れちゃって。可愛い」

思わず赤面する。わたしは慌てて頬を叩く。何動揺してんの、わたし。これはいつものリコの冗談に決まって……。

「ねえ、呼んで良いかな。アキちゃんって」

へ？

「私ね、ずっとずっとアキちゃんのこと、そう呼びたかったの。でも私ったら恥ずかしくて……私、この気持ちに気付けなかった。素直になれなかった」

何か、おかしい。

「でもね。そんなことは有り得ないって思っても、気が付いたら私、いつもいつもいつもいつもいつもいつもアキちゃんのことしか見てなかった。だ

から私、分かったんだ。これって運命なんだよ。私とアキちゃんは一つになる運命だったんだよ」

おかしい。おかしいよ。リコの様子がおかしい。わたしは後退りしながらドアへ近づこうとするが、両手をがっしりと掴まれて、リコに真正面から抱きつかれる。

「ちょっと!? 佐大さん……?」

「だからさ、一つになろう? 今ここで」

「待って待って! 意味が分からないよ!! リコ、私はそっち系なんじゃ」

「やっとリコって呼んでくれたね。私、嬉しい」

リコはピエロのようにニッコリと笑う。わたしは変な表情になりそうになって、思わず顔を逸らした。横に映る鏡には、鏡の『わたし』と道化師のような顔をしたリコがいた……。えっ……。どういう……。驚いてわたしは凝視する。

「最近のアキちゃんはさ、ちょっとおかしかったんだよね。わたしという相手がいないから、あんな私の部下なんかとイチャイチャしゃっててさ。分かってるよ、あの娘達が悪いんだもんね、アキちゃんは何も悪く無い。それにもう、そんなことはどうでもいい。私の部下なんて、私の自身の手で始末すればいいんだから。……そ

う、私がアキちゃんと先に一つになっちゃえば良いんだッッ!!」

「リ……、コ……?」

わたしは恐る恐るリコに顔を向けた。そこにはいつものリコはいなかった。鏡に写っていたのと同じ、道化師みたいな格好になって、全身は赤と黒のツートンに染まっている。わたしは突発的に振り解こうともがくが、もう遅い。リコは女子トイレ全域に闇のオーラを蔓延させて、空間を歪ませ始める。これって、確か前にガルベロスがやってた、

「ダークフィールド、なんで……」

「よく知ってるね。さっすがアキちゃん!　もしかしてもう一人の私の部下とも接触してたのかな?」

「そっ、それは……。さっきから部下部下って……もしかして、リコはッ!?!」

以前ノスフェルから聞いたことがある。

「他にですか。そうですね……闇の勢力には異星獣ことスペースビーストの他にも、ウルティノイドという私達を使役できる闇の種族がいますよ」

リコが言う部下。それはきつとノスフェルやガルベロスのことで間違いないだろ

う。彼女らの上司、みたいな位置に該当するものは多分ウルティノイド。じゃあ、そんな、リコが……そんな……!!

「そう。わたしは無限に広がる闇の権化、ダークファウスト。アキちゃんを追い回す忌まわしいカメラマンの影って言ったら分かるかしら?」

「リコ……嘘って言ってよ! こんなのおかしいよ……」

「何言ってるの? 私はあなたに恋をした。その運命は変えられないんだよ? だって私はこの力を得る前からあなたのことが大大好きだったんだから」

そう言いながらリコはダークフィールドから生まれた触手でわたしを捕らえて蝕んでいく。身動きがとれず、声も出すのが辛くなってきたわたしは必死になって声を出す。

「ど……どうということ?」

「半年前、私とアキちゃんが始めて会社にあった時から、私はアキちゃんが好きだった。私ね、レズなんだ。昔から周りに合わせようとして頑張ってみたんだけど、やっぱり男に興味なんて湧かない。女の子にしか異性の気持ちを持てなかったの。でもその直後、私よりもアキちゃんは条井ナギサとか言う男に惚れているんだって

私は気づいちゃった」

「違うよ、あれは先輩として憧れで……」

「嘘。私アキちゃんのことなら全部知ってるんだから。いつどこで何をしているのかなんて、私は全部知っているもん」

そう言ってリコはポケットみたいなところからカメラを取り出す。大量のSDカードも一緒に落ちる。まさか、姫さん以外にもわたしのストーキングしてた人がいたなんて……。

「ひいっ……!!」

「それからね、いつしか私にはモヤモヤした気持ちばかりが体を巡らせていたの。でもあるとき、闇の勢力のウルティノイドから私は力を得ちゃった☆そう、アキちゃんを私のものだけにする力が——」

リコは話を続ける。

「私の中にいるウルティノイドはね、この会社の何処かに眠るレーテを壊したいんだって」

「レーテ？ なんなの……それ」

「えーっと……確か光の勢力の来訪者っていう人達が作った大型メタフィールド……だったけ? あれのせいで私の部下達が地球に入るとみーんな人間になっちゃうんだよ。なーんでこんな会社なんかにあるんだろうね。でも今の私『たち』にとつて、そんなことはどうでもいい」

来訪者? 確か光の勢力ってネクサスの他にも何かいたんだっけ。……そっか。そういうことなのね。やっと分かった。そのレーテっていうおっきなバリアーが地球全体を覆ってたからノスフェルやガルベロス、他の異星獣達もみんな人間みたいになっちゃってたんだね……。でも、いまそんなこと知ったからって、この状況、ホントにヤバイ……。なす術もなく、触手はどんどん体をしめつけていく。リコはわたしに微笑みながら言う。その笑顔は恐怖すらも感じさせられてしまうほどだ。「愛の告白も済んだところだし、そろそろ始めよっか。私とアキちゃんの永遠の愛を誓う、ウェディングセレモニーを始めないとね♪」

「待って、リ……」

言い終わる前に、わたしは身体中に侵食する闇に完全に囚われてしまう。必死に足掻こうと蹴いても、いつのまにかきつく縛られた触手からは脱出できない。も

う、ダメ……。わたしは最後の力を振り絞る。

「はあ……はあ……助けて……ノスフェル、ガルベロス……姫さ、ん……………!!」

「

そして、わたしは果てしない無限の闇の中で意識を失ってしまった。

（アキの家）

「ふんふんふーん♪今日もアキちゃん様に一杯ご奉仕しなくては♡……ん、この波動、まさか……!!」

アキの家を掃除するノスフェル。アキが最後に叫んだ助けを求める声は、ダークファウストとなったリコが無意識に放つ闇の波動・ダークフィールドを通じて、奇跡的に伝わっていた。ノスフェルはビースト振動波を使ってガルベロスと連絡を取った。

「ガルベロス……ガルベロス、聞こえますか！ アキちゃんが緊急事態です、力

を貸してください!!」

〔江抜高校〕

なんだかんだで赤点を取ってしまい、夏休みなのに補講を受けていた軽部露乙津ことガルベロス。補講が終わり、いつも振り回している気弱な男友達と共に下校しようとしたその時、ノスフェルからの振動波を受けて彼女も漸くアキの状況とその裏に潜む存在に気付く。

「……ダーク、ファウストだと?　なんでアキがアイツに捕まっちゃってるんだよ!?　おいおい、やっと補講が終わったってのに……」

「軽部さん、今度はどうしたの……?　さっきから一人でブツブツと……」

「悪い千、俺ちよつと用事思い出した!」

「え!?　ちよつと困るよ軽部さんっ!!」

〔東都日報新聞社〕

光と闇は対極。常に反発し合う存在である。朝からネクサスとして戦ったばかり

にも関わらず、この男もまた、光の波動を放つことによってファウストの闇の波動を感じていた。彼は机にドンと叩いて勢いよく立ち上がる。

「クソッ……俺が守るって言っときながら古紋さんを守れなかった……アイツ、俺の影と言ったな。なら、こんなところで諦めて溜まるか！」

ノスフェル、ガルベロス、そして姫隼也は同じ一点の場所に向かって走り出す。

「俺が……！」

「ファウストから……！」

「アキちゃん様を取り戻す!!」

リコから、ダークファウストからアキを救うために……。

#8 共同戦線!アキちゃん様を救い出せ!! (ファウストなんて怖くないもん!)

あれ、なんか一年と四ヶ月間もわたし、リコに捕まってたような……。

と、とにかく前回までのあらすじ!

わたしの名前は古紋アキ、どこにでもいるような新人OLの女性。

ひよんなことから異生獣<sup>スペースビースト</sup>と名乗る娘・ノスフェルとわたしは一緒に暮らすこと

になってしまった。いつものように会社で仕事をしていたある日、わたしは同僚のリコに捕まってしまう。なんと彼女の正体は、スペースビーストの上司みたいなポジションであるウルティノイドの一人・ダークファウストだったの!! しかもリコは同性愛でわたしのことを狂愛してるからもう大変!? 果たして果たしてどうなっちゃうの、わたしっ!?

「アキちゃん様アアッー!!!」

ノスフェルは走った。ネズミのようにとにかくすばしっこく、例え火の中水の中であろうと走り続けた。ビースト振動波でダークファウストの位置を感知して、アキのもとへ向かうガルベロスと情報を共有し合う。

「落ち着くんだ、ノスフェル！ 先に合流してからの方がいい！」

「でも！ アキちゃん様がつ!!」

「相手はダークファウスト、俺達の元上司だぞ!! 下手すれば俺達は操られて返り討ちにされるがオチだ。今は待ってろ!!」

「嫌です嫌です！ 私は行きますからね!! 一刻の猶予も無いんですからっ……うぎゃあっっ!?!?!?」

言い終わる前にノスフェルはゆらりと崩れ落ちる。突然周囲に黄色い花粉が散乱しており、もろにそれを吸い込んだノスフェルの全身は痺れて身動きが出来なくなってしまうのだ。

「どうしたノスフェル!! この振動波……まさか、こんな時にか!?!」

ノスフェルは自慢の爪で花粉を振り払い、足の自由を取り戻して立ち上がった。「ぐぐっ……こんな季節外れな花粉、絶対に人技ではありませんね……!! 日中

は外に出ず、深夜の時間帯に活動する……、まさにブルームタイプのスペースビーストの特徴です!」

正体を見破ったノスフェルは地底から響く振動波を感知した。ノスフェルの勘はやはり当たっていたようだ。再び黄色い花粉が地中から放出される前にノスフェルは飛び上がって距離を取った。

「姿を現しなさい! ラフレシア!!」

その声を聞いて、コンクリートや電柱を木っ端微塵に粉碎して、地面からゆっくりとオレンジ色のワンピースの少女が現れる。両腕にはツルのような突起物を隠し持ち、頭には花卉のような黄色い帽子を被っている。そう、彼女こそが黄色い花粉を放出した異星獣・ラフレシアだ。普段は地底で暮らしていたせいか、泥だらけの彼女は日の当たる外に出るなり騒ぎ出す。

「ふはあっ……ぷはあつく……アスファルトあつつっ!……! 何よこの蒸し暑さ

! 頭狂ってんじゃないの!!」

「へっへーん! 夜行性アンド出不精が仇となりましたね、ラフレシア!」  
ノスフェルはそのまま指をビシッと指して元気よく叫ぶ。

「アキちゃん様が殺るなって言ってたこともありますし、今なら見逃してあげますよ。とっととお家にお帰りなさい!!」

ラフレイアはくしゃみをしながら答える。

「ふはあっ、ふはあつく……ふはあっ……くしょん!! ……嫌わよ! 確かにこんな蒸し暑眩しい時間なんか外に出たくなかったわよ! だからこうして闇人中からファウスト様からの任務を遂行してたのに……。もうノスフェル! 足止めしてるんだからちゃんと足止めされてよね!!」

「足止め……!? やはり、ダークファウストは既に私達が来ることを見越して……」

〈TLT社・ダークフィールド〉

「……フフフ。あなた達が来ることくらい、容易に想像が付くじゃない。アキちゃんを誑かす私の部下なんて必要ない。必ず始末させちゃうんだから!」

ダークファウスト、リコは裏切り者であるノスフェルとガルベロスがもうじきアキを助けに来ることは既に把握していた。そのため、事前にラフレイアに命令を下して足止めし、亜空間の中に閉じ込め、意識を失っているアキと交わろうとしてい

たのだ。リコは全身を触手で縛りつけられ、服もはだけているアキの頬に手を触れた。

「さっ、アキちゃん!! 早いところハネムーンの準備をしないとね!」

そう言ってリコはアキを眠姦しようと手を出した。

「もおおう! 早く痺れてよねっつ!! ふはあつくしょん!!」

ノスフェルとラフレイアの戦闘は続く。周囲に爆発性のある花粉を撒き散らし、花粉が付着した建物が次々と爆発する。更にこの花粉には猛毒性があり、スペースビーストであるノスフェルが下手に吸い込むと麻痺してしまう。そのためノスフェルはとにかく逃げ回るしかなかった。

「このままじゃ、町が壊れてしまう! アキちゃん様を救うのが優先ですが、仕方ありません」

ノスフェルは手からダークボウルを放って応戦する。

「だってここは、私とアキちゃん様が末永く幸せに暮らす大切な場所ですからね!!」

「ダークボウルを喰らったラフレイアは、地に足を着ける。

「ふはあつくしょん!! いったいじゃないノスフェル!!!!」

一旦は花粉が止まるも、怒って再び放出しようとする。

「もう! 絶対許さないんだからッッ!!!!」

しかし背後から火炎弾を浴びて、ラフレイアは尻餅を着いた。

「今度は何よっー!! ……って、ファウスト様!？」

ラフレイアが振り向くと、なんとそこにはリコがいた。動揺するラフレイア。しかしノスフェルには見覚えのある少女の姿だった。

「あっ、ガルベロス! 来てくれたんですね!!」

「ばっ馬鹿! 幻影を見せてる最中に言ったらバレルだろ!!」

しかし動揺していたラフレイアには耳に入っておらず、全く気付いていない様子だ。

「そんな……、どうして……!!」

完全に隙を付いたガルベロスはマフラーを靡かせて、そのままラフレイアの両腕

を噛み付くように拘束する。

「きゃああ!? ふはあつくしゅん!!」

ガルベロスの元にノスフェルは移動した。二人は身動きが封じられ、必死に抵抗するラフレシアを見つめた。ようやくリコが幻影で、その正体がガルベロスであったことに気付いたようだ。

「はっ!! ガルベロス!? よくも図っ……ふはくしゅん!! くっ……はあーなあーせえー!!!!!!」

ジタバタするラフレシアをみて、ガルベロスは呆れ顔でノスフェルに尋ねる。

「で、どーする? ノスフェル」

「このままギツタンギツタンに殺してやりたいところですが、きっとそれを知ったらアキちゃん様は悲しみます……。あっ、ところでどうしたんですか? その服、

確かセーラー服——」

ガルベロスは赤面する。彼女は恥ずかしさからまだノスフェルに女子高生をやっていることを伝えてなかったのだ。

「言わんでいい言わんでいい! とにかく、コイツは死なない程度にボコしてお

くぞ!!」

「ですね! ……ふふっ」

「うっせー! 笑うな!!」

そう言って二人はラフレシアに迫った。

「や、ヤメロー! 私は決して光には屈しないぞ! 絶対に負けて溜ま」

このあとノスフェルとガルベロスの総攻撃を受けたラフレシアは呆気なくノックダウンし、ピヨピヨしてる間に土の中に埋められた。ついでに再び花粉を撒き散らさないよう帽子も粉碎され、呆気なく完全敗北を喫したのであった。

「さっ! 早く向かいましょう! ……ガ・ル・ちゃん!!」

セーラー服を着ていたことから、ノスフェルはガルベロスが自分より若い体付きだったことを思い出した。更に地球、そして日本には年上を敬う文化が深く根付いていたこともあり、ノスフェルニヤニヤしながら敢えてそう呼んだのだ。ガルベロスが何か言い返す前にすぐに走り出した。

「言ってくれるじゃんか……!!」

ガルベロスは羞恥心に見舞われながらも、ノスフェルを追いかけた。

ビースト振動波を頼りに、TLT社の元へ着いた二人。しかしこのまま直行するにはあまりにも二人の格好は怪し過ぎる。何せノスフェルは普段アキの家で家事をしていること主なので、いつも主婦のようなエプロン姿の格好でいることが多い。そして慌てて飛び出た今回もエプロンを着けたまま。その上ガルベロスはセーラー服だ。ただでさえスペースビーストであることをなんとか隠して周囲の人々と生活しているため、こんなところでいきなり主婦もどきとJKが会社に乱入したら、後々アキに多大なる迷惑がかかることは目に見えている。

「むう……ガルちゃん、どうします?」

「そうだな。一旦飛んで屋上から侵入しよう。これなら怪しまれねえ!」

「ですね!」

二人は人目に付かない路地裏に回ってからジャンプ移動して屋上へと上がっていった。

「よっしゃ、これでいけるぜ! ……アキ!」

「ええ。待っててください! ……アキちゃん様!!」

そこにあのカメラマン、姫隼也も姿を現す。

「古紋さん！ 今行くぞ!!」

「えっ」

刹那、互いに顔を見合わせた三人の間は静寂に包まれる。

三者三様に驚愕し、沈黙はすぐに破られた。

「お前ら……まさかノスフェルとガルベロスだな!」

「げげっ！ ネクサス!」

「こんな時ってのにっ!!」

「上級スペースビーストが全く持つて見つからないと思ったら……。お前ら、今まで一体どこに隠れやがった!」

「へっへーんだ！ 私達上級ビーストにかかれば特定の知的生命体以外の認識を阻害させることぐらい容易いんですよっ!!」

「だが逆にネクサスの位置を認識できなくなることも考慮すべきだったがな……」  
「そんなことがお前たちに出来たとはな。だがもう関係ない、ここで倒させてもら

うぞ!!」

隼也はネクサスの姿に変わり、戦闘態勢に入る。しかし二人は戦うことを拒んだ。「お断りします! 今日あなたの相手をしている場合じゃないんです。さっきも邪魔されましたし、これ以上時間はかけられません! 私はっ、私はアキちゃん様を助けなければいけないんです! だからさっさと帰ってください!!」

「そーだそーだ! これは俺達元闇の勢力としての問題だ! ネクサスは引込んでろ!!」

『アキちゃん様……?』

それ聞いた隼也は首を傾げた。そして、すぐにあることに気付く。

「もしかしてお前、それって古紋さんのことか? まさか、お前ら古紋さんと……」

「漸くお気づきでしたか、私達は古紋さんの忠実なる下僕なんですから」

「いや俺は下僕じゃねーし! まあ……強いて言うなら、友達……かな。つうーか、なんでお前がアキのことを知ってるんだよ!」

『そうか、道理で古紋さんがビースト殲滅に対して非協力的だったわけか。お前らが古紋さんを惑わしたせいだ!』

「いやはや全くですね……。私は毎日アキちゃん様の美貌、布団、食器、歯ブラシ、スカート、ブラジャー、パンツ……。何もかもが惑わしてきてもうキュッツンキュッツ……いえいえ大変でしたよ」

『そっちの意味の惑わすじゃない！』

隼也は暫く考え込み、後ろを向いた。

『……まあいい。今日だけは一旦休戦としてやる。お前ら、力を貸してくれ』

「はい？」

『あのダークフィールドに乗り込むには、本来は来訪者が放つフェーズシフトウェーブによって発動するメタフィールドで書き換えなきゃいけない。しかし今の来訪者にはそんな余力は愚か、前の戦いで母星が消滅したこともあるから、生存者かいるかどうかすらも危ういところなんだ』

「はあ……」

『だからお前たちの力も必要なんだ。不覚だが、どうやらお前らと目的は同じようだしな』

再びノスフェル達の方に振り向いた隼也。ノスフェルは死んだ魚のような白い目



今にもリコはアキと一線を越えようとしていた。

「はあっう……や……め——」

「さあアキちゃん……前戯はこれくらいにして、始めよっか」

「そこまでです！」

「これ以上アキに手出しすんな！」

間一髪のところ、三人は現場に到着。すんでのところで間に合ったのだ。ウルティノイドであるリコの姿を始めて視認したネクサスは思わず声をあげる。

『これが……ウルティノイドだ?! この迫力、ビーストとは格が違う!』

リコは不敵にほくそ笑んだ。

「そう。私はファウスト。光を飲み込む、無限の闇だよ……。だから、私とアキちゃんの初めてのコネクトを邪魔しないでよッ!!」

そう言ってリコ、即ちファウストは三人に攻撃を仕掛けてきた。

「はわっ!?! ……流石ウルティノイド。何があろうと問答無用、ということですね!」

「ふんっ、面白い。全力で邪魔してやるよ!」

攻撃を躲したノスフェルとガルベロスはそれぞれの武器を構えた。

「望むところよ、裏切り者のビーストちゃん達!」

そう叫んだと同時に禍々しい波動を解き放つファウスト。闇の力が十二分に備わった弾丸が次々と飛ばしていく。

『ファウスト! お前が無関係な人間を闇に吞もうと、俺が振り払う!!』

攻撃を避けていたネクサスは両腕のカッターのような武器、アームドネクサスに光粒子エネルギーを集中させる。やがて光の粒子は刃の形に変形して、ファウストの動きを牽制した。

「痛っ! 足首はダメなのっ!!」

足首を負傷したファウストは金切り声をあげた。その腹いせとばかりに次々と周囲を爆発させていく。

「ぐはああっっ!!」

「ふわあああっ!!」

爆発に巻き込まれたノスフェルとガルベロスは悲鳴をあげた。更に間髪を入れずファウストは頭上に光弾を放って空中で分裂させて降らせていく。

「くっ……ダーククラスタールか！　いいだろう、一気に決めてやる!!」  
攻撃を耐えたネクサスは、両腕をL字に組んで破壊光線を放つシックエンスを行う。

「——ジエイヤアアアッ！——!!」

攻撃は命中し、ファウストから煙が舞い上がる。

『やったか!?!』

立ち上がったノスフェルは叫ぶ。

「まだです、それ生存フラグですからっ！」

ノスフェルの言う通り、ファウストは倒れていなかった。彼女はなんと闇のエネルギーで作り出した円形状のバリアで光線を防いでいたのだ。

「アッハッハアッ——。ほんっと、爪が甘いね。ネクサス、アンタの光は私が食べ  
てあげるっ!!」

『なにっ……ぐがあああ!!——!!』

ネクサスを押さえ込んだファウストはそのまま光の力を吸収していく。

「ネクサス！」

「動いたらコイツを殺すわよ、ビーストちゃんたち」

『なんて卑劣な……』

「おい、どうするノスフェル。このままじゃネクサスまで!」

「いえ、彼ならどうせ自分でなんとかできます。どうにか目をそらしてアキちゃん様を救出することが最優先です。でも、どうすれば……」

どうせ……。ガルベロスは呆れながらも打開策を思い付く。

「いや待て、お前のビーストヒューマンと俺の幻覚を使えばいけるぞ——」

ノスフェルはコクリと頷く。ファウストは腕を正面を真っ直ぐに伸ばした闇のエネルギーを溜め出した。

「ごちゃごちゃ話してる余裕があるなら、さっさと死んでよ!」

ファウストはそのまま闇の光線を二人に向けて放った。大爆発が起こる。みるみる体力が削れていくネクサスはその様子を見て驚愕していた。

『……ダークレイ・ジャビローム。馬鹿な、貴様本当にビースト達を!』

「いいじゃない。アキちゃんと私を邪魔する相手はみんな死ねばいいもん。じゃつ、最後にあなたを殺さないかね」

『ぐふうっ!!』

ファウストはネクサスを解放して投げ飛ばした。倒れ落ちたネクサスに再び光線を撃とうとした。

「待ってよ、リコ!!」

「え、アキちゃん……!?」

その声を聞いてファウストは驚いて攻撃を止める。拘束して眠らせたはずのアキが確かにそこにいたのだ。ファウストは動揺してアキの手を触れた。

「なんで? 確かに捕まえてたはずなのに、目覚めないはずなのに……!?」

ファウストはアキを捕らえていた場所を再確認したが、やはりそこにはアキがない。では、一体なぜ?

「リコ、わたしのこと好きにしていいいから。——ほら、今はわたしだけを見て」  
アキの誘惑にファウストは動揺を隠せない。

「えっ、あっ、えっ……」

「リコ、大好きだよ」

ファウストの頬が蕩け落ちる。思考が完全に停止し、頭から湯気が止まらない。

その隙に立ち上がるネクサス。

『これは、まさか……』

ネクサスは察する。そこに爆発に巻き込まれていた筈のガルベロスが飛び上がった。するとファウストの目前にいたアキは人形のように崩れ落ちる。

「そのまさかだ! ノスフェル!!」

続いてノスフェルも煙から現れる。気絶している本物のアキを抱き抱えて。

「ガルちゃん、ネクサス! アキちゃん様はこの通り救出成功です!!」

ノスフェルが作り出したアキのビーストヒューマンに、ガルベロスの幻影でファウストの注意を逸らし、その隙にアキを助け出す咄嗟の作戦。ファウストは未だに騙されたことに気付かずふにゃふにゃしている。想定以上に効果覷面だったようだ。

『よし、脱出するぞ!』

ネクサスは巨大な竜巻を発生させて自身とビースト達を巻き上げて、飛行。ダークフィールドから脱出した。

「——ここは……？」

わたしは目を覚ました。辺り一面、晴天の天井。そこには、あのウザったらしくも可愛げのある白色の目の家政婦さんの顔が。

「良かった、目が覚めたんですね！」

目をパチクリして、わたしは呟く。

「ノス、フェル……」

「はい♡ 無事で何よりです、アキちゃん様！」

そっか、わたし、リコに捕まって、そして、助けてくれたんだね。

「——ありがとう。それと」

ノスフェルはスマイル満開でこちらを見つめている。うーん、言い難いな。そろそろ膝枕やめて欲しいんだけど……。更に二人の救出者達の顔もひよいとわたしを

覗く。

「無事で何よりだ。アキ」

「ガルベロス、それに姫さんまで」

「姫さん言うなつての! ……たく、コイツらのことについて後で詳しく聞かせてもらうからな。古紋さん」

「あはは……」

げっ。姫さんにノスフェル達のことバレてら。でも、この空気、もしかして一緒に力を合わせて助けに来てくれたのかな。ふふっ、微笑ましいことだ。光と闇は善悪で決めるもんじゃない。やっぱりわたしは、みんなが仲良く暮らせる世界が良いんだなって。

「オノレ……オノレオノレエエエー!!!」

突然辺りをつんざく邪な悲鳴が響き渡った。

「なっ、何!?!」

満身創痍、ボロボロの姿で髪や目がなんかヤバイ感じなオーラに包まれているリ

コの姿だ。ガルベロスと姫さんはわたしを守るように構えた。

「……不届きを失礼します、アキちゃん様」

ノスフェルは膝枕状態のわたしをゆっくりと起こして座らせる。そして無言でリコの前へと進んで行った。ノスフェルの奴、一体何を。

——まさか。最悪の可能性を考慮し、わたしは声の限り叫んだ。

「ダメ！ リコを殺さないで!!」

ノスフェルは何も言わずに進み続ける。力を使い果たしたのか、リコはその場で崩れ落ちる。暫く見つめた後、ノスフェルはようやく口に出した。

「ファウスト。アキちゃん様を犯そうとしたあなたの罪は谷より深く、マグマよりも熱い。例え<sup>①</sup>神へアキちゃん様〈が赦そうとも、私には決して赦すことはできない」

そんな。リコの正体には確かにびっくりしたけど。でもそんなことッ……。

グサリ。ノスフェルの爪は、リコを貫く。

「故に、あなたには背負ってもらいます。この世界で、生きるということを」

みるみるうちにリコの体内から闇が浄化されていき、傷も癒えていく。

「ビーストが、闇を祓った、だど!？」

姫さんは驚きを隠せない。わたしはほっと一息つく。全く、ヒヤヒヤさせてくれる娘だ。

「良かった……リコ、元に戻ったんだね」

「確かに元には戻ったな」

ガルベロスは静かに答えた。

「あくまでノスフェルはリコに憑いていたファウストを殺したんだ。親殺し、同族殺しをしたことには変わらない」

「そっ、か……」

少しモヤモヤした。確かにファウストは許せない。でも出来ることなら他の方法でなんとかしたかった。

「それに、ファウストが消えたからって、リコさんの気持ちが変わったわけじゃないと思うぞ？」

へっ……？

わたしは恐る恐る振り返る。いない。刹那、背後に気配とやわらかい感触と怪しい吐息を感じ取る。

「ア、キ、ち、ゃ、ん、♡」

「ヒイツツツツ!!」

逃げる間もなくリコに囚われ肩に顎を乗せられ、尻を鷲掴みにされる。

「あの……、佐大、さん……？」

「ふふっ、私の愛は本物なんだよ！ 今後ともよろしくね、アキちゃん!!」  
嘘でしょ……。少しは懲りてよ……。

「あーっ!! 一緒の隙について、アキちゃん様になんてことをっー!!」  
ノスフェルの怒号が響き渡った。ガルベロスと姫さんは肩をすくめる。同じ仕事を  
をしたお互いの様子を見て、すぐに「ふんっ!」と腕を組み合っているが。

「ははは……」

居間、プライベート、通勤路だけでなく、職場までわたしの日常を侵食するとい  
うのか……。とほほ……。

誰かわたしに長期休暇を分けてくれ……。。

# すぺーすびーすと!～ネクサス怪獣擬 人化作戦～

---

著者 地獄星バロー

発行日 2021 年 6 月 24 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/204799/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。